

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input checked="" type="checkbox"/> 講義 <input type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
医療倫理学	平塚 健太 (実務経験教員)	2	1	前期
授業概要	臨床で求められる医の倫理感を身に着ける基礎となる講義を行う			
到達目標	臨床における倫理観, マナー, 常識を知り, 理解できるようになる			
授業計画				
1	倫理とは	オリエンテーション・倫理の概要を理解する		
2	医療における倫理	医療倫理の4原則について理解し、考えを述べることができる		
3	医療者と患者の関係①	医療面接の基本的な考えを理解し、考えを述べるができる		
4	医療者と患者の関係②	医療面接の手法を理解し、考えを述べるができる		
5	コメディカルの職業倫理①	理学療法士・作業療法士の職業倫理を理解する		
6	コメディカルの職業倫理②	理学療法士・作業療法士の職業倫理を理解し、考えを述べるができる		
7	生命誕生のあらし①	出生前診断, 胚選別, 妊娠中絶について理解する		
8	生命誕生のあらし②	出生前診断, 胚選別, 妊娠中絶について理解し、考えを述べるができる		
9	薬害と医療事故	薬害の歴史や医療事故について理解し、考えを述べるができる		
10	人工臓器	ES 幹細胞移植 iPS細胞の治療や倫理的問題を理解する		
11	臨床研究の倫理①	臨床研究における倫理の歴史を基に考えを述べるができる		
12	臨床研究の倫理②	臨床研究における倫理の歴史を基に考えを述べるができる		
13	障害の受容	障害を受け入れる過程について理解する		
14	終末期医療, 安楽死と尊厳死	終末医療と尊厳死について理解を深め, 自分の考えを述べるができる		
15	まとめ	症例課題に基づき自分の考えをまとめ, 述べるができる		
教科書	必要に応じて提示する	履修条件	15回の講義なので4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	教養としての生命倫理	留意事項等	できるだけ欠席せず, 予習復習を怠らないこと	
成績評価	・15回の講義のなかで, 適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる			
備考				

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input type="checkbox"/> 講義 <input checked="" type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
医療情報科学演習Ⅰ	外館 洸平 (実務経験教員)	1	1	前期
授業概要	パソコン操作を不便なく行うことができ、ICT化する臨床現場に対応できるように推奨する情報収集のあり方などを、講義・演習を通して習得できる			
到達目標	パソコンの基本的な使用方法と情報リテラシーを身に着け、自身で取りまとめた情報を対外的に公開することができるようになる			
授業計画				
1	オリエンテーション	パソコンの基本的な操作を習得することができる		
2	Gmail、Google Classroom	メールでの連絡方法、およびGoogle Classroomを使用した課題の提出方法を習得することができる		
3	OneNote	OneNoteを使用して授業のノートをとることができる		
4	Word	文章を入力などの基本的な操作、レイアウト変更や図表の挿入ができ、見やすい文章を作成することができる		
5	PowerPoint	基本的な操作を理解し、プレゼンテーション用の資料を作成することができる		
6	Excel	基本的な操作を理解し、グラフ作成、関数を使用した計算を行うことができる		
7	情報リテラシー①	自他の個人情報の重要性を知り、個人情報を守るために正しく対処できる		
8	情報リテラシー②	文献検索の意義を理解し、文献検索を行うことができる。また、著作物に関する権利を理解し、正しく用いることができる。		
9				
10				
11				
12				
13				
14				
15				
教科書	資料配布	履修条件	8回の講義なので、3回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	必要に応じて提示する	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	各回で課題の提出を求め、提出物が指定された条件を満たしているか採点する			
備考	基本操作の紹介は行うが、操作の習熟は各自の自己練習に期待したい			

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input checked="" type="checkbox"/> 講義 <input type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
解剖学	成田 大一 (実務経験教員)	2	1	前期
授業概要	全ての医学的知識の基盤となる人体の構造ならびにその機能について運動器、循環器などの器官系に分けて系統的に学習する。また学習の理解度を深めるためにグループでの討議を取り入れる。小テストをこまめに実施して理解度を確認する。 本授業では担当教員の臨床における理学療法士としての実務経験ならびにこれまでの肉眼解剖教育の経験を活かして講義を展開する。			
到達目標	1. 医療分野における解剖学の重要性を説明できる 2. 解剖学用語を理解し、適切に用いることができる 3. 運動器の構造を理解し、各部位の名称や役割・特徴について説明できる 4. 骨格模型を用いて、各骨の名称ならびにそれらの連結について説明できる 5. 循環器系の構造を理解し、各部位の名称や役割・特徴について説明できる 6. 他学生とのグループ討議を通して理解を深めることができる			
授業計画				
1	オリエンテーション	・医療分野における解剖学の重要性を理解し、説明できる ・身体の部位や方向に関する解剖学用語を理解し、説明できる		
2	運動器系概論： 骨格系・筋系	・各面における運動について説明できる ・骨格を構成する骨と軟骨について、その構造や役割を説明できる ・各骨同士の連結について説明できる ・骨格筋の構造と関節の構成要素について説明できる		
3				
4				
5				
6	運動器系概論：神経系	・末梢神経について、その種類や特徴、役割を説明できる		
7	運動器系各論：体幹	・体幹の骨格構造についてその全体像ならびに各骨の形状や特徴、連結について説明できる ・体幹の運動に関連する筋の起始・停止や支配神経、作用について説明できる		
8				
9				
10	運動器系各論：上肢	・上肢の骨格構造についてその全体像ならびに各骨の形状や特徴、連結について説明できる ・上肢の運動に関連する筋の起始・停止や支配神経、作用について説明できる		
11				
12				
13	体幹・上肢の骨格系の復習 (骨格模型を用いたグループワーク)	・体幹・上肢の骨格構造について骨格模型を用いながらグループ内で討議できる		
14		・体幹・上肢の骨格構造についてその全体像ならびに各骨の名称や形状、特徴、連結について骨格模型を用いて説明できる		
15	運動器系各論：上肢	・上肢の運動に関連する筋の起始・停止や支配神経、作用について説明できる		
16				
17	運動器系概論・各論 (体幹・上肢)復習	・これまで学習してきた運動器系の概論・各論(体幹・上肢)について理解を深め、これらの構造や機能をより詳しく説明できる		

18	運動器系各論：下肢	<ul style="list-style-type: none"> ・下肢の骨格構造についてその全体像ならびに各骨の形状や特徴，連結について説明できる ・下肢の運動に関連する筋の起始・停止や支配神経，作用について説明できる 	
19			
20			
21	下肢の骨格系の復習 (骨格模型を用いたグルー	<ul style="list-style-type: none"> ・下肢の骨格構造について骨格模型を用いながらグループ内で討議できる ・下肢の骨格構造についてその全体像ならびに各骨の名称や形状，特徴，連結につい 	
22	運動器系各論：下肢	<ul style="list-style-type: none"> ・下肢の運動に関連する筋の起始・停止や支配神経，作用について説明できる 	
23			
24	運動器系各論：頭頸部	<ul style="list-style-type: none"> ・頭頸部の構造ならびに頭蓋の形状や連結，各孔の名称およびそこを通る構造物，特徴について説明できる ・表情筋や咀嚼筋，外眼筋など脳神経に支配される筋について説明できる ・目や耳といった特殊感覚器の構造について説明できる 	
25			
26			
27	頭頸部の骨格系の復習 (骨格模型を用いたグルー	<ul style="list-style-type: none"> ・頭蓋について骨格模型を用いながらグループ内で討議できる ・頭蓋の形状や連結，各孔の名称ならびにそこを通る構造物，特徴について骨格模型 	
28	循環器系	<ul style="list-style-type: none"> ・動脈と静脈の特徴ならびに大動脈とそこから分岐する枝について説明できる ・心臓の構造と機能ならびに刺激伝導系，心臓に分布する動脈・静脈について説明できる ・リンパ管系について説明できる 	
29			
30			
教科書	・塩田浩平，他監：グレイ解剖学 原著第4版	履修条件	30回の講義の内，7回以上欠席の場合は定期試験を受験できない
参考書	<ul style="list-style-type: none"> ・加藤征，監：Qシリーズ 新解剖学 フルカラー新装版 ・坂井建夫，他編：カラー図解 人体の正常構造と機能 全10巻縮刷版 ・相磯貞和，他：ネッター解剖学アトラス 原著第6版 ・松村譲児：イラスト解剖学 第9版 	留意事項等	できるだけ欠席せず，予習復習を怠らないこと
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・小テスト，中間試験・期末試験，グループワークの内容をもって総合的に評価します ・総計の60%以上を合格とします。 		
備考	<ul style="list-style-type: none"> ・授業資料を配布するので忘れずに授業に持ってくる ・分からない点を質問するなど教員をうまく活用し，知識の定着に努めること 		

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input type="checkbox"/> 講義 <input checked="" type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
解剖学演習	成田 大一 (実務経験教員)	1	1	後期
授業概要	神経系, 消化器系, 呼吸器系, 泌尿生殖器系, 内分泌系について系統的に学習する。また学習の理解度を深めるためにグループでの討議を取り入れる。小テストをこまめに実施して理解度を確認する。 本授業では担当教員の臨床における理学療法士としての実務経験ならびにこれまでの肉眼解剖教育の経験を活かして講義を展開する。			
到達目標	1. 解剖学用語を理解し, 適切に用いることができる 2. 神経系の構造を理解し, 各部位の名称や役割・特徴について説明できる 3. 消化器系の構造を理解し, 各部位の名称や役割・特徴について説明できる 4. 呼吸器系の構造を理解し, 各部位の名称や役割・特徴について説明できる 5. 泌尿生殖器系の構造を理解し, 各部位の名称や役割・特徴について説明できる 6. 内分泌系の構造を理解し, 各部位の名称や役割・特徴について説明できる 7. 他学生とのグループ討議を通して理解を深めることができる			
授業計画				
1	大脳(終脳)	大脳の形態と機能局在について説明できる		
2	大脳の内部構造と白質	大脳の内部に存在する神経核(大脳基底核など)と白質を構成する神経線維について説明できる		
3	間脳・脳幹	間脳(視床, 視床下部, 視床上部)ならびに脳幹(中脳-橋-延髄)の構造と機能について説明できる		
4	小脳・脊髄	小脳, 脊髄の構造と機能について説明できる		
5	伝導路	錐体路や錐体外路などの下行路と脊髄視床路などの上行路について説明できる		
6	髄膜と脳脊髄液, 脳室系 脳の血管	内頸動脈系と椎骨動脈系, 動脈輪, 脳室と脳脊髄液の循環経路について説明できる		
7	脳神経の種類と特徴	脳神経とは何か, その構造と機能について説明できる		
8	自律神経系	自律神経系の構造と機能について説明できる		
9	消化器系	・口腔から肛門に至る消化管の構造と機能を説明できる。		
10		・消化に必要な酵素を産生・貯蔵する付属器官についてその構造と機能を説明できる ・消化管に分布する動脈・静脈について説明できる		
11	呼吸器系	鼻腔から肺に至る呼吸器の構造と機能を説明できる		
12				
13	泌尿・生殖器系	腎臓や膀胱, 尿道などの泌尿器と精巣や卵巣, 子宮などの生殖器について男女の違いも含めてその構造と機能を説明できる		
14				
15	内分泌系	内分泌系の構造と機能について説明できる		
教科書	・塩田浩平, 他監: グレイ解剖学 原著第4版		履修条件	15回の講義の内, 4回以上欠席の場合は定期試験を受験できない

<p>参考書</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・坂井建夫, 他編: カラー図解 人体の正常構造と機能 全10巻縮刷版 ・加藤征, 他編: 新解剖学 フルカラー新装版 第7版 (Qシリーズ) ・相磯貞和, 他: ネット解剖学アトラス 原著第6版 ・松村譲児: イラスト解剖学 第9版 	<p>留意事項等</p>	<p>できるだけ欠席せず, 予習復習を怠らないこと</p>
<p>成績評価</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・小テスト, 期末試験, グループワークの内容をもって総合的に評価する ・総計の60%以上を合格とする 		
<p>備考</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・授業資料を配布するので忘れずに授業に持ってくること ・分からない点を質問するなど教員をうまく活用し, 知識の定着に努めること 		

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input checked="" type="checkbox"/> 講義 <input type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
生理学	石田 裕二 (実務経験教員)	2	1	前期
授業概要	生体機能の基礎的知識（生命活動の本質）、呼吸、循環、消化、排泄、それらを調節する自律神経や内分泌系の働きを学習する 特に各種の障害に深く関係する神経生理学を重視した内容を展開する			
到達目標	生体機能についてそのメカニズムの理解を深め、専門分野の学習が円滑に行うための基礎医学的知識を習得し、医学的視点からフィジカルアセスメントにつながる基礎的な知識を深めることができる			
授業計画				
1	概説	生命現象とは何か、人体の構造とその概略についてイメージできるようになる		
2	細胞 ①	生命の原点である細胞の構造と機能についてその概略が理解できる		
3	細胞 ②	分極、脱分極、再分極など細胞膜と生命現象の関係の概略を理解できる		
4	神経系①	ニューロン（neuron）、シナプス（synapse）など、神経の基本構造を理解できる		
5	神経系②	中枢神経系（脳と脊髄）の構造と機能の概略を理解できる		
6	神経系③	中枢神経系と末梢神経系の形態的・機能的な分類ができるようになる		
7	筋生理	筋収縮に関するエネルギー供給・代謝について説明できる 滑走説を説明できる		
8	脊髄反射①	脊髄の構造と機能の概略を説明できる 筋紡錘の構造と機能を説明できる		
9	脊髄反射②	脊髄反射の回路が理解できる 錘内筋の活動、機能について理解できる		
10	脊髄内の伝導路	上行路と下行路の詳細を学習し、その機能を理解できる		
11	運動ニューロンについて	脊髄反射の回路の概略を把握し、上位・下位運動ニューロンとの関係性が理解できる		
12	神経障害概論①	錐体路障害と錐体外路障害について理解できる		
13	神経障害概論②	運動麻痺と感覚障害の発生機序について、神経系の構造と機能から理解できる		
14	自律神経概論	植物機能の神経性制御について概略を理解できる		
15	内臓学概論	循環器と呼吸器の構造と機能の概略を理解できる		
16	血液・体液	ホメオスタシスに関与する血液・体液について、その機能の概略を理解できる		
17	呼吸・循環器各論①	呼吸器・循環器の構造と機能が理解できる		
18	呼吸・循環器各論②	心疾患と肺疾患、それにまつわる酸塩基平衡障害についての概略が理解できる		

19	呼吸・循環器各論③	心電図の概略が理解できるようになる	
20	呼吸・循環器各論④	呼吸器と循環器の機能の関連性と心電図の変化の概略が理解できる	
21	心電図学①	心電図のメカニズム、診断的価値について理解を深めさせる	
22	心電図学②	心電図の波形の意味について考えを深め、代表的な異常心電図についてその発生機序を考察できる	
23	内分泌学①	ホルモンやサイトカインについて論じ、その作用について理解を深めさせる	
24	内分泌学②	内分泌に関わる臓器、生産過程などを理解できる	
25	自律神経系各論	ホルモンと共に神経性制御についてりかいはできる	
26	泌尿器学①	腎臓と膀胱の機能と構造について理解できる	
27	泌尿器学②	膀胱の神経支配、排尿反射と神経因性膀胱の概略を理解できる	
28	消化器学①	消化器の構造と機能について概略が理解できる	
29	消化器学②	消化酵素（科学的消化）の作用について理解できる	
30	酸塩基平衡	呼吸・代謝機能の全貌から酸塩基平衡の維持機能について理解できる	
教科書	Qシリーズ 新生理学	履修条件	電子教科書にて授業を進行する PCを用意すること30回の講義なので、7回以上欠席すると定期試験を受験できない
参考書	ギャノン生理学	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・30回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる 		
備考			

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input type="checkbox"/> 講義 <input checked="" type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
生理学演習	石田 裕二 (実務経験教員)	1	1	後期
授業概要	生理学演習では生理学で学んだ知識を具体的に演習を通じて体験し、臨床に必要な不可欠な知識の理解を深める			
到達目標	臨床現場に必要な基礎的な知識と技術（バイタルサインの計測など）を習得し、専門領域につながる技能を習得する			
授業計画				
1	循環器系の計測	循環動態と血圧の関係を理解し医学的根拠を持って血圧を計測することができる		
2	心電図 ①	心電図の基礎的なメカニズムを理解することができる		
3	心電図 ②	標準12誘導と胸部単極誘導について臨床的意味を説明できるようになる		
4	心電図 ③	異常心電図と正常心電図を比較し、病的問題点を評価できるようになる		
5	心電図 ④	標準12誘導を具体的に計測し、その臨床的技術を習得する		
6	呼吸器系 ①	呼吸器疾患の臨床像とスパイログラムの関係を理解できる		
7	呼吸器系 ②	スパイログラムを用いた肺機能の計測を体験し理解を深める		
8	呼吸循環 ①	有酸素運動と無酸素運動、ATポイントなどの意味を理解する		
9	呼吸循環 ②	運動負荷試験を体験し臨床的意義や基礎的知識を習得する		
10	筋電図 ①	筋電図の波形についてその意味を理解できる		
11	筋電図 ②	筋電図データの解析についてその意味と手法を理解できる		

12	筋電図 ③	表面筋電計を用いて具体的に計測し波形と骨格筋・神経制御の実態を把握できる	
13	筋電図 ④	誘発筋電計を用いてF波やH波の計測し、脊髄の興奮性について理解を深める	
14	筋電図 ⑤	誘発筋電計を用いて末梢神経伝導速度を計測し、臨床的意義を理解する	
15	感覚検査	表在・深部感覚の具体的な計測から、神経障害の症状についての理解を深める	
教科書	Qシリーズ 新生理学	履修条件	電子教科書にて授業を進行する PCを用意すること15回の講義なので、4回以上欠席すると定期試験を受験できない
参考書	ギャノン生理学	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・15回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる 		
備考			

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input checked="" type="checkbox"/> 講義 <input type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
人間発達学	千葉 馨 (実務経験教員)	1	1	前期
授業概要	人が成長する過程について中枢神経系の発達を中心に社会的に活躍し老年期に至るまでを理解し、その各ステージでの理学療法士・作業療法士の関わる視点を理解できる			
到達目標	新生児期からの発達過程に関わる神経系の理解と身体活動について理解できる			
授業計画				
1	人間発達学の学び方	ヒトの発達について学ぶにあたり必須用語や講義のあらましについて理解できる		
2	発達の概念	胎芽と胎児の発達過程に始まり、人間発達期、発達の主な原則などが理解できる		
3	発達理論と発達検査	発達理論（所説）を元に発達検査の評価内容から正常発達について理解できる		
4	姿勢反射、反応	発達過程における反射・反応について学び、正常な発達の獲得の背景である中枢神経の成熟、筋と骨格の成長について理解できる		
5	運動発達0~3か月	健常児における0~3か月の運動発達について理解できる		
6	運動発達4~6か月	健常児における4~6か月の運動発達について理解できる		
7	運動発達7~9か月	健常児における7~9か月の運動発達について理解できる		
8	中間試験	講義の1~7回目の内容について中間テストを行う		
9	運動発達10~12か月	健常児における10~12か月の運動発達について理解できる		
10	運動発達13~18か月	健常児における13~18か月の運動発達について理解できる		
11	姿勢反射、反応 6歳まで	6歳までに見られる姿勢反射および反応獲得について理解できる		
12	上肢機能の発達	ヒトの上肢機能を学び、成長過程で獲得できる運動等について理解できる		
13	ADLの発達	中枢神経系の発達と日常生活活動動作（ADL）の獲得の関係を理解できる		
14	感覚・知覚・認知・社会性の発達	環境の刺激情報処理である感覚、知覚、認知について学び、感覚システムの発達について理解できる		
15	学童・青年・成人・老年期の発達	学童期から老年期までの発達について理解できる		
教科書	上杉雅之監修 イラストでわかる人間発達学 医師薬出版株式会社	履修条件	前講義の1/5以上を欠席すると単位を取得できない	
参考書	講義資料中に示す	留意事項等	・適宜小テストを不定期に行うので授業で行った部分の理解・知識の補完を常に行うこと	
成績評価	中間および期末試験、授業態度、提出物について成績の対象とする。 以上「C評定」より単位修得となる			60点

備考	授業終了後の理解度アンケート、不定期な小テスト等を実施する。 積極的な質問を歓迎する。
----	--

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input checked="" type="checkbox"/> 講義 <input type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
運動学	羽澤 晃士 (実務経験教員)	2	1	前期
授業概要	運動学は身体運動の仕組みに関する学問であり、その理論的基盤をなす専門基礎科目である。本授業科目では、正常な身体運動を理解するうえで必要な運動器の基本構造と機能を学ぶ。さらに、身体各部位の関節構造と機能を関節運動と関連づけて学習し、機能解剖学的視点から四肢、脊柱・体幹、頭部における各関節運動の仕組みを深める			
到達目標	リハビリテーションの対象となる運動障害のメカニズムを理解するために、身体運動を遂行するうえで必要な運動器（筋骨格系・神経系）の基本構造と機能を学び、四肢、脊柱・体幹、頭部における各関節運動の仕組みについて説明できるようになる			
授業計画				
1	オリエンテーション	本授業の概要ならびに運動学の学問領域について理解できる		
2	骨の構造と機能	骨格を形成する骨の名称、骨の基本構造と機能について理解できる		
3	関節の構造と機能①	関節の基本構造、関節の分類について理解できる		
4	関節の構造と機能②	運動軸と運動面を基準とした関節運動の表し方について理解できる		
5	骨格筋の構造と機能①	関節包内における関節運動の表し方について理解できる		
6	骨格筋の構造と機能②	骨格筋の構造について理解できる		
7	骨格筋の構造と機能③	筋の収縮機序、活動電位について理解できる		
8	骨格筋の構造と機能④	筋線維の種類、運動単位、神経支配比について理解できる		
9	骨格筋の構造と機能⑤	筋の収縮様式、筋のはたらき、筋肥大と筋萎縮について理解できる		
10	骨格筋の構造と機能⑥	筋の静止張力と活動張力について理解できる		
11	生体力学①	関節モーメント、外力と内力について理解できる		
12	生体力学②	身体とてこの関係、筋力と重力の関係について理解できる		
13	体位と重心①	体位と構え、基本肢位、重心が規定される要素について理解できる		
14	体位と重心②	基本的立位姿勢の理想的アライメントについて理解できる		
15	肩複合体の運動学①	肩複合体の構造について理解できる		

16	肩複合体の運動学②	肩複合体の関節運動について理解できる	
17	肩複合体の運動学③	肩複合体の関節運動における靭帯の作用について理解できる	
18	肩複合体の運動学④	肩複合体の関節運動における筋の作用について理解できる	
19	肘関節・前腕の運動学①	肘関節・前腕の構造，関節運動について理解できる	
20	肘関節・前腕の運動学②	肘関節・前腕の関節運動における靭帯および筋の作用について理解できる	
21	手関節の運動学①	手関節の構造，関節運動について理解できる	
22	手関節の運動学②	手関節の関節運動における靭帯および筋の作用について理解できる	
23	手指の運動学①	手指関節の構造，関節運動について理解できる	
24	手指の運動学②	手指関節の関節運動における靭帯および筋の作用について理解できる	
25	股関節の運動学①	股関節の構造，関節運動について理解できる	
26	股関節の運動学②	股関節の関節運動における靭帯および筋の作用について理解できる	
27	膝関節の運動学①	膝関節の構造，関節運動について理解できる	
28	膝関節の運動学②	膝関節の関節運動における靭帯および筋の作用について理解できる	
29	足関節の運動学①	足関節の構造，関節運動について理解できる	
30	足関節の運動学②	足関節の関節運動における靭帯および筋の作用について理解できる	
教科書	基礎運動学	履修条件	30回の講義なので，7回以上欠席すると定期試験を受験できない
参考書	運動学（15レクチャーシリーズ 理学療法・作業療法テキスト）	留意事項等	できるだけ欠席せず，予習復習を怠らないこと
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・30回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストと定期テストの結果を総合して成績に反映させる 		
備考			

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input type="checkbox"/> 講義 <input checked="" type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
運動学演習	羽澤 晃士 (実務経験教員)	1	1	後期
授業概要	本実習では、運動学で身につけた知識をもとに、種々の身体運動・動作を実際に観察、計測して、身体運動・動作の仕組みについてさらに理解を深める 実習はテーマ毎に小グループに分かれて行い、分析結果をグループ内で討議してレポートにまとめる			
到達目標	リハビリテーションの対象となる運動・動作障害に対する評価を実践するために必要な運動・動作の観察および計測方法について学び、正常な運動・動作を分析できるようになるとともに、分析した結果を説明できるようになる			
授業計画				
1	ガイダンス ①	本科目の概要や学習目標、内容、スケジュールの説明を受けて、学習方法や実習レポートの書き方について理解を深める		
2	ガイダンス ②			
3	体表解剖 ①	上肢、下肢、体幹の骨ならびに筋の触診を行い、各部位の形状、骨の形・ランドマーク、筋の走行、筋の起始停止、筋腹や腱の形状、求心性・遠心性収縮時における筋緊張と張力の関係などを確認し理解を深める		
4	体表解剖 ②			
5	体表解剖 ③			
6	項目別実習 ①	小グループを結成し、粗大な筋力の把握、静的姿勢から動的姿勢へ移行するときの姿勢分析、合目的動作（寝返り・起き上がり・座位・立位・歩行）における動作分析などを演習し、健全な成人の運動パターンについての知識を深め、病態運動学等の専門科目につながる基礎的な知識が理解できる		
7	項目別実習 ②			
8	項目別実習 ③			
9	項目別実習 ④			
10	項目別実習 ⑤			
11	項目別実習 ⑥			
12	項目別実習総合指導 ①	小グループで計測した項目別実習のデータを分析して、運動学的視点からの考察を述べ（発表し）、ディスカッションを行うことで、人体の動きを臨床的視点で理解できるようになる		
13	項目別実習総合指導 ②			
14	項目別実習総合指導 ③			
15	項目別実習総合指導 ④			
教科書	基礎運動学	履修条件	15回の講義なので、4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	運動学（15レクチャーシリーズ 理学療法・作業療法テキスト）	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・15回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる 			
備考				

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input type="checkbox"/> 講義 <input checked="" type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
臨床運動学演習	成田 大一 (実務経験教員)	1	2	前期
授業概要	運動学で学習した内容を臨床的視点で身体運動について理解し、説明できる。			
到達目標	歩行をはじめとする基本動作のメカニズムについて理解し、説明できる。			
授業計画				
1	骨格筋復習 オリエンテーション	解剖学・運動学を通して学習した骨格筋についてその名称と作用を説明できる 本講義の概要を理解する		
2	レポートの書き方 二関節筋と関節可動域	演習時のレポートの書き方について理解する		
3		二関節筋による関節可動域への影響について説明できる		
4	関節運動と筋収縮	求心性収縮・遠心性収縮・等尺性収縮について説明できる		
5	OKCとCKC	OKCとCKCについて説明できる		
6	関節角度と筋張力	関節角度や重心位置による筋張力の変化について説明できる		
7		モーメントについて説明できる		
8	床反力と身体運動	荷重位での身体運動に関連する力学について説明できる		
9	スクワット動作の観察	スクワット動作における動作観察・分析を実践できる		
10	スクワット動作の観察	スクワット動作における動作観察・分析を実践できる		
11	歩行①	「歩行」における動作分析のポイントを説明できる		
12	歩行②	「歩行」における動作分析のポイントを説明できる		
13	歩行③	「歩行」における動作分析のポイントを説明できる		
14	歩行④	「異常歩行」とその原因について説明できる		
15	歩行⑤	「歩行」における動作観察・分析を実践できる		
教科書	『基本動作の評価と治療アプローチ (メジカルビュー社)』 『観察による歩行分析 (医学書院)』	履修条件	講義・演習ではPCを使用することもある 15回の講義なので、4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	『基礎運動学 (医歯薬出版)』 「実践! 動作分析 第2版 (医歯薬出版)」 『動作分析 臨床活用講座 (メジカルビュー社)』	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	・初回テスト、期末試験、レポートの内容をもって総合的に評価します ・総計の60%以上を合格とします。			
備考	運動学・運動学演習を習得していることを前提に講義・演習を実施する			

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input type="checkbox"/> 講義 <input checked="" type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
機能解剖学演習	成田 大一 (実務経験教員)	1	2	後期
授業概要	解剖学・運動学の知識を統合し、身体運動を検査・治療方法等と関連付けられるように講義演習を行う。小テストをこまめに実施して理解度を確認する。 本授業では担当教員の臨床における理学療法士としての実務経験ならびにこれまでの肉眼解剖教育の経験を活かして講義を展開する。			
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・末梢神経系の分布先を説明できる ・肩甲帯・肩関節の構造を理解し、運動ならびに形態学的特徴を説明できる ・肘関節・前腕の構造を理解し、運動ならびに形態学的特徴を説明できる ・手関節・指の構造を理解し、運動ならびに形態学的特徴を説明できる ・骨盤・股関節の構造を理解し、運動ならびに形態学的特徴を説明できる ・膝関節の構造を理解し、運動ならびに形態学的特徴を説明できる ・足関節の構造を理解し、運動ならびに形態学的特徴を説明できる ・足部の構造を理解し、運動ならびに形態学的特徴を説明できる 			
授業計画				
1	末梢神経系の構造と支配領域	運動の情報を伝える末梢神経系の構造、特に神経叢について理解し、その分布について説明できる		
2	肩甲帯・肩関節周囲の構造と運動	肩関節を構成する骨格・靭帯ならびに肩関節に作用する筋を機能解剖学的視点から見直し、肩甲帯ならびに肩関節の運動・特徴を説明できる。		
3				
4	肘関節と前腕の構造と運動	肘関節を構成する骨格・靭帯ならびに肘関節に作用する筋を機能解剖学的視点から見直し、肘関節ならびに前腕の運動・特徴を説明できる。		
5				
6	手関節・指の構造と運動	手関節・指を構成する骨格・靭帯ならびにこれらに作用する筋を機能解剖学的視点から見直し、手関節ならびに指の運動・特徴を説明できる。		
7				
8	骨盤・股関節の構造と運動	股関節を構成する骨格・靭帯ならびに股関節に作用する筋を機能解剖学的視点から見直し、股関節の運動・特徴を説明できる。		
9				
10	膝関節の構造と運動	膝関節を構成する骨格・靭帯ならびに膝関節に作用する筋を機能解剖学的視点から見直し、膝関節の運動・特徴を説明できる。		
11				
12	足関節の構造と運動	足関節を構成する骨格・靭帯ならびに足関節に作用する筋を機能解剖学的視点から見直し、足関節の運動・特徴を説明できる。		
13				
14	足部の構造と運動	足部を構成する骨格・靭帯ならびに足部に作用する筋を機能解剖学的視点から見直し、足部の運動・特徴を説明できる。		
15				
教科書	授業は配布資料に基づいて実施する	履修条件	15回の講義なので、4回以上欠席すると定期試験を受験できない	

<p>参考書</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・塩田浩平, 他監: グレイ解剖学 原著第4版 ・Paul D. Andrew, 他監訳: 筋骨格系のキネシオロジー 原著第3版 ・中村隆一, 他: 基礎運動学 第6版補訂 	<p>留意事項等</p>	<p>できるだけ欠席せず, 予習復習を怠らないこと</p>
<p>成績評価</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・小テスト, 期末試験の内容をもって総合的に評価する ・総計の60%以上を合格とする 		
<p>備考</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・授業資料を配布するので忘れずに授業に持ってくること ・分からない点を質問するなど教員をうまく活用し, 知識の定着に努めること 		

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input checked="" type="checkbox"/> 講義 <input type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
神経障害学Ⅰ	石田 裕二 (実務経験教員)	1	2	前期
授業概要	神経障害はPT・OTの治療対象の中核をなすものであり、臨床神経学の知識は直接治療技術に反映する。本科目は神経解剖から症候学まで必要不可欠かつ基本的な内容を網羅する。			
到達目標	神経系の構造と機能を熟知し、様々な症候を医学的に理解できるようになる。			
授業計画				
1	神経解剖 ①	中枢神経系（脳・脊髄）の解剖，機能局在が理解できる		
2	神経解剖 ②	中枢神経と末梢神経の構造と機能が理解できる（脳神経を中心に）		
3	神経解剖 ③	上行路と下行路，各種伝導路の構造と機能を理解できる		
4	神経解剖 ④	錐体外路，小脳の伝導路の名称，構造と機能を理解できる		
5	神経症候学 ①	上位ニューロン障害と下位ニューロン障害の特徴を説明できる		
6	神経症候学 ②	錐体路障害による脊髄解放現象により起こる症状を理解できる		
7	神経症候学 ③	錐体外路症状について理解できる		
8	神経症候学 ④	高次脳機能障害について理解できる		
9	神経症候学 ⑤	認知症の分類，症状，周辺症状（BPSD）などを説明できるようになる		
10	神経症候学 ⑥	小脳症状，球麻痺症状などの症状について理解できる		
11	神経症候学 ⑦	脊髄損傷の様々な症状・障害について理解できる		
12	神経症候学 ⑧	ミオパチーとニューロパチー，筋委縮の病態や分類について理解できる		
13	神経症候学 ⑨	内科疾患で惹起される神経・筋症状についてそのメカニズムを理解できる		
14	画像診断学	様々な神経症状と画像の関係性について理解できる		
15	まとめ	仮想症例に関してさまざまなアセスメントを展開できるようになる		
教科書	病気がみえる vol.7 脳・神経 メディックメディア社	履修条件	15回の講義なので，4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	神経診察クローズアップ正しい病巣診断のコツ メディカルビュー社	留意事項等	できるだけ欠席せず，予習復習を怠らないこと	
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・15回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる 			
備考				

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input checked="" type="checkbox"/> 講義 <input type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
神経障害学Ⅱ	平塚 健太 (実務経験教員)	1	2	前期
授業概要	神経障害学Ⅰの内容を踏まえ、本科目は具体的な神経疾患とその症状・治療について論じる			
到達目標	リハビリテーションに必要な神経疾患の理解を深め、専門領域で治療学に応用できる知識を習得し治療に応用できるようになる			
授業計画				
1	脳血管疾患 ①	多種の脳血管疾患の疫学と診断について理解できる		
2	脳血管疾患 ②	脳血管疾患に起因する症状や治療法について理解できる		
3	脳卒中 ①	脳卒中の危険因子・脳卒中の分類及び特徴について理解できる		
4	脳卒中 ②	脳卒中の分類別における症状や治療について理解できる		
5	脳卒中 ③	脳卒中の急性期における治療や特徴について理解できる		
6	脳卒中 ④	脳卒中の急性期におけるリスク管理について理解できる		
7	脳卒中 ⑤	脳卒中の回復期及び維持期における治療や特徴について理解できる		
8	認知症/高次脳機能障害①	認知症・失語症・失認・失行等の高次脳機能障害の特徴について理解できる		
9	認知症/高次脳機能障害②	認知症・高次脳機能障害の治療・姿勢定位障害について理解できる		
10	パーキンソン病	高齢者によくみられるパーキンソン病の症状や治療法を説明できる		
11	神経筋疾患 ①	筋ジストロフィーやALSの特徴について理解できる		
12	神経筋疾患 ②	各種の変性疾患(SCD・MS・PSP等)について理解できる		
13	脊髄損傷	脊髄損傷の症状、高位診断、神経学的評価法などを説明できる		
14	医用画像 ①	実際の症例や画像情報などから症状・障害を推測し医学的に考察できる		
15	医用画像 ②			
教科書	病気がみえる vol.7 脳・神経	履修条件	15回の講義なので、4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	適宜提示	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	・15回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる			
備考	筋ジストロフィーやALSの特徴について理解できる			

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input checked="" type="checkbox"/> 講義 <input type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
スポーツと健康科学	鈴木 康裕 (実務経験教員)	1	2	後期
授業概要	健康・スポーツ科学分野において、疫学的研究手法を用い、観察研究および介入研究によるエビデンスの構築方法を理解する。また、傷害予防・再発予防の見地からスポーツ現場で行われているテーピング等の手法の実際を理解する。			
到達目標	生活習慣病や老化の予防を科学的見地から評価し、健康の維持・増進や疾病の予防・改善に貢献できる、また競技スポーツにおいて、科学的な見地から競技者の傷害予防や競技力向上に貢献できる人材を育成する。			
授業計画				
1	総論	スポーツ医科学の新しい概念とスポーツを通じた知見を社会に役立てる（社会実装）事例について理解する		
2	体力測定会の企画立案 方法論①	体力測定会の立案、実施の方法説明を通し、倫理面での配慮および企画方法を理解する		
3	体力測定会の企画立案 方法論②	実際の企画例の講義を通して、自ら企画立案できる方法を理解する		
4	体力測定会における 企画立案の実践①	グループワークを通し、体力測定会を企画できる		
5	体力測定会における 企画立案の実践②	グループワークを通し、体力測定会の企画書を作成できる		
6	体力測定会の実践①	グループワークを通し、実際に体力測定会の準備を行うことができる		
7	体力測定会の実践②	グループワークを通し、実際に体力測定を実施することができる		
8	体力測定会における 結果の解釈①	グループワークを通し、得られた結果を解釈することができる		
9	体力測定会における 結果の解釈②	グループワークを通し、結果報告書（資料）を作成することができる		
10	腰部・股関節テーピング	腰部・股関節のスポーツ傷害に対するテーピングを実践できる		
11	腰部・股関節テーピング	腰部・股関節のスポーツ傷害に対するテーピングを実践できる		
12	足関節テーピング	足関節のスポーツ傷害に対するテーピングを実践できる		
13	膝関節テーピング	膝関節のスポーツ傷害に対するテーピングを実践できる		
14	上肢テーピング	肩・肘・手関節スポーツ傷害に対するテーピングを実践できる		
15	テーピング	外部講師の先生に依頼		
教科書	「石山修盟, 著: 正しく効果的に巻ける！テーピングの新しい教科書（日本文芸社）」		履修条件	15回の講義なので、4回以上欠席すると定期試験を受験できない
参考書	講義内で適宜提示		留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・15回の講義のなかで、適宜グループワーク、必要に応じて小テストを実施する ・グループワークおよび小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる 			
備考				

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input checked="" type="checkbox"/> 講義 <input type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
内部障害理学療法治療学	工藤 達也 (実務経験教員)	1	2	後期
授業概要	高齢者や在宅クライアントによくみられる内部障害について深く学び、治療技術を臨床に反映できるよう実践的な内容を学ぶ			
到達目標	様々な内科的問題を医学的に解釈・統合し具体的な治療に反映できるようになる			
授業計画				
1	循環器系の機能と構造	心臓および血管の構造と特徴について理解できる		
2	虚血性心疾患	虚血性心疾患(心筋梗塞, 狭心症)の病態および理学療法について理解できる		
3	喀痰と吸引	喀痰・吸引について意義と方法を理解し, 手技を習得できる		
4	心不全	心不全の病態および理学療法について理解できる		
5	不整脈 ①	不整脈の発生機序および分類, 心電図の見方について理解できる		
6	不整脈 ②	各不整脈における心電図の特徴的所見について理解できる		
7	呼吸器系の機能と構造	気管および肺の構造と特徴および呼吸不全の病態について理解できる		
8	慢性閉塞性肺疾患	慢性閉塞性肺疾患(COPD)の病態および理学療法について理解できる		
9	周術期の理学療法	周術期(術前・術後)における評価および理学療法について理解できる		
10	人工呼吸管理と理学療法	人工呼吸器の構造および基本的なモード, 人工呼吸管理における理学療法について理解できる		
11	糖尿病 ①	糖尿病の病態および合併症, 治療内容について理解できる		
12	糖尿病 ②	糖尿病の理学療法および糖尿病足病変について理解できる		
13	腎疾患	腎機能障害の分類および症状, 理学療法について理解できる		
14	がん ①	悪性腫瘍の種類, 病態や治療法について理解できる		
15	がん ②	緩和ケアを含めたがんへの介入法について理解できる		
教科書	シンプル理学療法学シリーズ 内部障害理学療法学 テキスト 改定第3版, 南江堂	履修条件	15回の講義なので, 4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	なるほどなっとく! 内科学 改定2版, 南山堂	留意事項等	できるだけ欠席せず, 予習復習を怠らないこと	
成績評価	・15回の講義のなかで, 適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる			
備考				

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input type="checkbox"/> 講義 <input checked="" type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
症例検討演習Ⅰ	平塚 健太、成田 大一、羽澤晃士 (実務経験教員)	1	2	後期
授業概要	同職種、他職種との連携を主体にケース課題や事例について考えを表出できるよう演習を行うので活発な発言を期待する			
到達目標	同職種、他職種との連携を主体にケース課題や事例について分析・考察し、考えを表出できる			
授業計画				
1	オリエンテーション	症例検討の意義や症例報告に必要な情報を理解できる		
2	情報・評価項目の選定	症例検討に必要な情報や評価を選定できる		
3	症例検討①	運動器疾患の症例についてディスカッションおよび発表できる		
4	症例検討②	運動器疾患の症例についてディスカッションおよび発表できる		
5	症例検討③	運動器疾患の症例についてディスカッションおよび発表できる		
6	症例検討④	運動器疾患の症例についてディスカッションおよび発表できる		
7	症例検討⑤	高次脳機能障害の症例についてディスカッションおよび発表できる		
8	症例検討⑥	高次脳機能障害の症例についてディスカッションおよび発表できる		
教科書	適宜	履修条件	8回の講義なので、3回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	適宜	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	・8回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる			
備考				

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input type="checkbox"/> 講義 <input checked="" type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
症例検討演習Ⅱ	工藤 達也、外館 洸平、鈴木 康裕 (実務経験教員)	1	2	後期
授業概要	同職種、他職種との連携を主体にケース課題や事例について考えを表出できるよう演習を行うので活発な発言を期待する			
到達目標	同職種、他職種との連携を主体にケース課題や事例について分析・考察し、考えを表出できる			
授業計画				
1	症例検討①	神経筋疾患の症例についてディスカッションおよび発表できる		
2	症例検討②	神経筋疾患の症例についてディスカッションおよび発表できる		
3	症例検討③	内部疾患の症例についてディスカッションおよび発表できる		
4	症例検討④	内部疾患の症例についてディスカッションおよび発表できる		
5	症例検討⑤	脳卒中の症例報告についてディスカッションおよび発表ができる		
6	症例検討⑥	脳卒中の症例報告についてディスカッションおよび発表ができる		
7	症例検討⑦	脳卒中の症例報告についてディスカッションおよび発表ができる		
8	まとめ	症例検討演習Ⅰ・Ⅱの振り返り、解釈することができる		
教科書	適宜	履修条件	8回の講義なので、3回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	適宜	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	・8回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる			
備考				

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input checked="" type="checkbox"/> 講義 <input type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
リハビリテーション医学	石田 裕二 (実務経験教員)	1	1	後期
授業概要	リハビリテーション医学が対象とする疾患、脳卒中、頭部外傷、脊髄損傷、脳性麻痺、変性疾患、切断等についてそれらを理解し、リハビリテーションについて考えられるよう講義を行う			
到達目標	リハビリテーション医学が対象とする疾患、脳卒中、頭部外傷、脊髄損傷、脳性麻痺、変性疾患、切断等についてそれらを理解できる			
授業計画				
1	オリエンテーション	リハビリテーションを学ぶにあたり、基本的な用語やポイントについて理解できる		
2	リハビリテーションに深く かかわる解剖生理学①	2回にわたり、筋骨格系の構造と機能（筋収縮や関節運動など）、神経系の構造と機能（上位運動ニューロンと下位運動ニューロン 脳神経など）を具体的な症状と照らし合わせて理解できる		
3	リハビリテーションに深く かかわる解剖生理学②			
4	脳血管疾患 ①	CI(脳梗塞), CH(脳出血), SAH(クモ膜下出血)等について学習し、リハビリテーションに関係する症状について概略を理解できる		
5	脳血管疾患 ②	症状と脳の機能局在の関係性を学習し、脳血管疾患が引き起こす症状について理解できる		
6	脳血管疾患 ③	脳血管疾患により出現する様々な臨床症状について理解できる		
7	認知症	認知症の分類、症状について理解し、患者への介入法の概要を理解できる		
8	脊髄損傷 ①	脊損の病理、高位診断と残存機能の関係について理解できる		
9	脊髄損傷 ②	残存機能とADLの関係、OT/PTの介入の方法について理解できる		
10	神経筋疾患 ①	神経原性の変性疾患を中心に学習し、理解を深める		
11	神経筋疾患 ②	筋原性の疾患を中心に学習し、理解を深める		
12	内部障害 ①	呼吸器系の疾患について理解を深める		
13	内部障害 ②	循環器（心臓を中心に）の疾患について理解ができる		
14	内部障害 ③	膠原病や代謝性疾患（糖尿病など）について理解できる		
15	整形外科疾患	RA, OA, FF(大腿骨々折), 切断・離断, 肩関節障害などについて理解できる		
教科書	PT・OT・ST・ナースを目指す人のための リハビリテーション総論 要点整理と用語解説 改訂第3版		履修条件	15回の講義なので4回以上欠席 すると定期試験を受験できない
参考書	必要に応じて提示する		留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を 怠らないこと
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・15回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる 			
備考				

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input checked="" type="checkbox"/> 講義 <input type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
リハビリテーション概論	鈴木 康裕、佐藤 速太 (実務経験教員)	1	1	前期
授業概要	リハビリテーションの理念・概要について、PT・OTとリハビリテーションに関わる専門職との連携などについて理解できるよう講義・グループワークを行う。			
到達目標	リハビリテーションの理念をふまえ、具体的な障害例に対するリハビリテーションに関わる専門職との連携などについて理解できる。			
授業計画				
1	リハビリテーションとは	リハビリテーションの語源・定義、目的について理解する。		
2	医療・福祉に関わる専門職・チーム医療	医療及び保健・社会福祉に関わる専門職とチーム医療について調べる。		
3	障害モデル	障害モデル（ICIDH、ICF）について理解できる。		
4	障害モデル	障害モデル（ICIDH、ICF）について理解できる。		
5	ICFフレームワーク	症例を通してICFフレームワークを実践できる。		
6	ノーマライゼーション	ノーマライゼーション、バリアフリー、ユニバーサルデザインについて理解できる。		
7	リハビリテーションと地域貢献	リハビリテーションについて病院の中以外での活用方法を考える。		
8	総合演習	これまで学んできたことをもとに、リハビリテーションについて説明することができる。		
教科書	必要に応じて提示する	履修条件	8回の講義なので3回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	必要に応じて提示する	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	・グループワークや課題への取り組み、テストを成績に反映する。			
備考				

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input checked="" type="checkbox"/> 講義 <input type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
地域包括ケアシステム論	工藤 達也 (実務経験教員)	1	2	後期
授業概要	医療・福祉、地域リハビリテーションを担う様々な専門職の役割を理解できるような授業を展開し、多職種連携による包括的な地域医療福祉活動の必要性を論じる			
到達目標	地域包括ケアシステムにおける医療の役割や医療福祉連携について理解できる			
授業計画				
1	地域包括ケアシステムⅠ	地域包括ケアシステムの概念や背景、現代における地域包括ケアシステムの重要性について理解できる		
2	地域包括ケアシステムⅡ	地域包括支援センターの役割や地域包括ケア会議の概要を理解できる		
3	ニーズの把握と理解	対象者(生活者)のニーズの捉え方やアプローチ方法を理解できる		
4	地域包括ケアシステムにおけるセラピストの役割	地域包括における理学療法士、作業療法士の役割を理解できる		
5	多職種連携・チームアプローチ	多職種連携・チームアプローチの理念と意義について理解できる		
6	地域包括ケアシステムにおける社会福祉士の役割	地域包括ケアシステムにおける社会福祉士の役割について理解できる		
7	地域包括ケアシステムにおける看護師の役割	地域包括ケアシステムにおける看護師の役割について理解できる		
8	地域包括ケアシステムにおけるケアマネジャーの役割	地域包括ケアシステムにおけるケアマネジャーの役割について理解できる		
9	多職種連携演習Ⅰ	多職種連携演習(グループワーク)を通じて、多職種連携の重要性や各職種の役割を理解できる		
10	多職種連携演習Ⅱ			
11	多職種連携演習Ⅲ			
12	多職種連携演習Ⅳ			
13	多職種連携演習Ⅴ			
14	多職種連携演習Ⅵ			
15	まとめ	多職種連携における各職種の役割および包括的な地域医療福祉活動の必要性を理解できる		
教科書	検討中	履修条件	15回の講義なので、4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	地域包括ケアにおけるPT・OTの役割 個別地域ケア会議・介護予防事業から学ぶ	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	15回の講義のなかで、適宜課題を実施し、課題提出や内容を総合して成績に反映させる			
備考	グループワークも適宜行う			

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input checked="" type="checkbox"/> 講義 <input type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
理学療法概論	工藤 達也 (実務経験教員)	2	1	前期
授業概要	理学療法の定義と歴史を理解し医療ならびに社会全体における理学療法の位置づけ、基本的な理学療法の理論、知識と技術について把握する。また、理学療法を施行する上で関わる障害や疾患について理解を深める。			
到達目標	理学療法・理学療法士に関する基本的知識を理解できる。 理学療法の定義や治療手段、対象となる障害、理学療法士の役割について理解できる。			
授業計画				
1	オリエンテーション	理学療法概論で学習する内容や基礎科目との関連性を理解できる		
2	理学療法の定義と歴史	理学療法の定義と歴史について理解できる。		
3	理学療法に関わる法律	理学療法士および作業療法士法について理解できる。		
4				
5	理学療法の流れ	理学療法が行われる際の一連の流れ、臨床思考過程について理解できる。		
6				
7	疾患と機能障害①	疾患と機能障害の関連性やそれぞれの意味について理解できる。また、疾患についてのグループワーク学習を通じて疾患と機能障害について理解を深める。		
8				
9	疾患と機能障害②	疾患と機能障害の関連性やそれぞれの意味について理解できる。また、疾患についてのグループワーク学習を通じて疾患と機能障害について理解を深める。		
10				
11	住環境と理学療法	家屋改修や福祉用具など在宅における理学療法士の関わりを理解できる。 歩行補助具体験を通じて、各歩行補助具の特徴やメリット・デメリットを理解できる。 また、屋外での車椅子乗車・操作体験を通じて、屋外での移動に対する理解を深める。		
12				
13	病院の機能と役割①	理学療法士の主な活動の場である病院について、病期の違いによる役割や実施されているリハビリテーション、病棟機能などを理解できる。又、函館市の主要な病院についての調べ学習を通じて理解を深める。		
14				
15	病院の機能と役割②	理学療法士の主な活動の場である病院について、病期の違いによる役割や実施されているリハビリテーション、病棟機能などを理解できる。又、函館市の主要な病院についての調べ学習を通じて理解を深める。		
16				
17	理学療法に必要な知識 重心と支持基底面	重心と支持基底面の関係性や、基本動作における重心および支持基底面の変化について理解できる。また、基本動作体験を通じて理解を深める。		
18				

19	理学療法に必要な知識 関節可動域とその評価	関節の構造や機能，関節可動域の定義や評価・測定方法について理解できる。 関節可動域制限の主な原因について理解できる。 疑似的な関節可動域制限の状態を体験することでADLに及ぼす影響について理解できる。	
20			
21	理学療法に必要な知識 関節可動域制限と運動療法	関節可動域訓練の手技方法や適応について理解できる。また，関節可動域訓練の実技を通じて理解を深める。	
22			
23	理学療法に必要な知識 筋力とその評価	筋肉の機能や構造，筋力の定義や評価・測定方法について理解できる。 筋力低下の主な原因について理解できる。 各収縮様式の違いやOKCとCKCの違いについて実技を通じて理解を深める。	
24			
25	理学療法に必要な知識 筋力低下と運動療法	筋力増強訓練の手技方法や作用および効果について理解できる。また，筋力増強訓練の実技を通じて理解を深める。	
26			
27	理学療法に必要な知識 リスク管理	リスク管理の意義や必要性，理学療法時の実践方法について理解できる。 バイタルサインの定義や評価・測定方法について理解できる。	
28			
29	まとめ	理学療法および理学療法士に関する基本的知識，理学療法の対象や主な治療手段について理解できる。	
30			
教科書	適宜、資料を配布する	履修条件	30回の講義なので，7回以上欠席すると定期試験を受験できない
参考書	検討中	留意事項等	できるだけ欠席せず，予習復習を怠らないこと
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・30回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる 		
備考			

		<input type="checkbox"/> 講義 <input checked="" type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
基礎理学療法Ⅰ	工藤 達也 (実務経験教員)	2	1	後期
授業概要	理学療法を行う上で基礎となる骨や筋の触診技術を習得し、解剖学・運動学分野の総合的理解を深める			
到達目標	骨ランドマークの位置および名称，筋の起始停止および走行を理解することができる 骨ランドマーク，筋の触診技術を習得することができる			
授業計画				
1	オリエンテーション 肩甲帯の触診	オリエンテーション， 肩甲帯のランドマークを理解し，触診方法を習得できる		
2				
3	上腕・前腕の触診	上腕・前腕のランドマークを理解し，触診方法を習得できる		
4				
5	骨盤の触診	骨盤のランドマークを理解し，触診方法を習得できる		
6				
7	大腿・下腿の触診	大腿・下腿のランドマークを理解し，触診方法を習得できる		
8				
9	脊柱の触診	脊柱の骨の位置関係を理解し，触診方法を習得できる		
10				
11	総合演習①	各ランドマークの触診の総合演習を実施し，臨床に必要な技術を習得できる		
12				
13	肩甲帯周囲筋触診	肩甲帯周囲の主要な筋の起始・停止を理解し，触診方法を習得できる		
14				
15	上腕部の筋の触診	肩甲帯周囲・上腕部の主要な筋の起始・停止を理解し，触診方法を習得できる		
16				
17	前腕部の筋の触診	上腕・前腕部の主要な筋の起始・停止を理解し，触診方法を習得できる		

18	前腕部の筋の触診	上腕・前腕部の主要な筋の起始・停止を理解し，触診方法を習得できる	
19	総合演習②	肩甲帯・上肢の主要な筋の触診の総合演習を実施し，臨床に必要な技術を習得できる	
20			
21	骨盤周囲筋の触診	骨盤周囲の主要な筋の起始・停止を理解し，触診方法を習得できる	
22			
23	大腿部の筋の触診①	大腿前面の主要な筋の起始・停止を理解し，触診方法を習得できる	
24			
25	大腿部の筋の触診②	大腿後面および側面の主要な筋の起始・停止を理解し，触診方法を習得できる	
26			
27	下腿部の筋の触診	下腿部の主要な筋の起始・停止を理解し，触診方法を習得できる	
28			
29	総合演習③	骨盤・下肢の主要な筋の触診の総合演習を実施し，臨床に必要な技術を習得できる	
30			
教科書	資料を適宜配布する	履修条件	30回の講義なので，7回以上欠席すると定期試験を受験できない
参考書	グレイ解剖学 原著第4版 基礎運動学 第6版	留意事項等	講義時間内で技術を習得できるよう集中して臨むこと
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・30回の講義のなかで，適宜実技テストを実施する ・実技テスト，課題レポートの結果を総合して成績に反映させる 		
備考	触診を行うため，ある程度の肌の露出が可能ならできればTシャツ・短パンで講義に臨むこと		

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input type="checkbox"/> 講義 <input checked="" type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
基礎理学療法学Ⅱ	外館 光平 (実務経験教員)	2	2	前期
授業概要	理学療法評価の基礎となる姿勢・動作観察の方法を学び、文章として報告できるようにグループワークを中心に演習していく。			
到達目標	理学療法に必要な姿勢・動作観察の表記方法や方法を学ぶ			
授業計画				
1	オリエンテーション	姿勢・動作観察の目的を理解でき、文章化に必要な基礎的な知識を習得できる		
2				
3	姿勢観察(立位)①	立位姿勢の特徴や関連するバイオメカニクスを理解できる		
4	姿勢観察(立位)②	立位姿勢の観察、および表記方法を理解できる		
5	動作観察(起立動作)①	起立動作のバイオメカニクスを理解できる		
6	動作観察(起立動作)②	起立動作の観察、および表記方法を理解できる		
7	姿勢分析(立位)	立位姿勢の観察・分析(誘導)、および表記方法を理解できる		
8	動作分析(起立動作)	起立動作の観察・分析(誘導)、および表記方法を理解できる		
9	動作観察(着座動作)①	着座動作のバイオメカニクスを理解できる		
10	動作観察(着座動作)②	着座動作の観察、および表記方法を理解できる		
11	姿勢観察(臥位)①	臥位姿勢の特徴や関連するバイオメカニクスを理解できる		
12	姿勢観察(臥位)②	臥位姿勢の観察、および表記方法を理解できる		
13	動作観察(寝返り動作)①	寝返り動作のバイオメカニクスを理解できる		
14	動作観察(寝返り動作)②	寝返り動作の観察、および表記方法を理解できる		
15	姿勢分析(臥位)	臥位姿勢の観察・分析(誘導)、および表記方法を理解できる		
16	動作分析(寝返り動作)	寝返り動作の観察・分析(誘導)、および表記方法を理解できる		
17	姿勢観察(座位)①	座位姿勢の特徴や関連するバイオメカニクスを理解できる		
18	姿勢観察(座位)②	座位姿勢の観察、および表記方法を理解できる		

19	動作観察(起居動作)①	起居動作のバイオメカニクスを理解できる	
20	動作観察(起居動作)②	起居動作の観察、および表記方法を理解できる	
21	姿勢分析(座位)	座位姿勢の観察・分析(誘導)、および表記方法を理解できる	
22	動作分析(起居動作)	寝返り動作の観察・分析(誘導)、および表記方法を理解できる	
23	動作観察(段差昇降)①	段差昇降動作のバイオメカニクスを理解できる	
24	動作観察(段差昇降)②	段差昇降動作の観察、および表記方法を理解できる	
25	動作観察(床上動作)①	床上動作のバイオメカニクスを理解できる	
26	動作観察(床上動作)②	床上動作の観察、および表記方法を理解できる	
27	動作分析①	動作指導・トレーニングを想定して、患者役の近くから起立・着座動作(スクワット)、ランジ動作などを観察・分析を行う。動作の修正を徒手的に行い、治療的な視点を持つことができる	
28	動作分析②		
29	動作分析③		
30	動作分析④		
教科書	基本動作の評価と治療アプローチ (メジカルビュー社)	履修条件	30回の講義なので、12回以上欠席すると定期試験を受験できない
参考書	適宜提示	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと
成績評価	グループワークでの課題、個人でのレポート課題、期末テストの成果をもとに、総合的に判断する		
備考			

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input type="checkbox"/> 講義 <input checked="" type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
理学療法評価学演習Ⅰ	鈴木 康裕 (実務経験教員)	2	1	後期
授業概要	評価は、効果的な理学療法を実施するうえできわめて重要な理学療法プロセスに位置づけられる。本科目では、評価の意義や目的、その一連の進め方について学習する。また、理学療法における基本的検査・測定技術である関節可動域測定法、筋力測定法について講義および演習を通して習得する。			
到達目標	理学療法評価における各種検査・測定手技（関節可動域測定、徒手筋力検査法）を学び、その基本的手技を実施できるようになる。			
授業計画				
1	オリエンテーションおよび評価学概論	本授業の概要、学習目標・内容、スケジュール、学習方法の説明、評価とは何かを理解できる		
2	一般的評価事項	問診・観察・面接（すべての始まり）を通して、「見立て」にはどのような情報が必要か理解できる		
3	関節可動域測定 総合演習①	関節可動域（ROM）とはなにか、また、臨床におけるROMの情報（具体的な数値、抵抗感、end feel など）の重要性についても理解できる		
4	肩関節の可動域測定①	肩関節のROM測定を演習し、手技を習得できる		
5	肩関節の可動域測定②	肩関節のROM測定を演習し、手技を習得できる		
6	肘関節の可動域測定	肘関節のROM測定を演習し、手技を習得できる		
7	手関節の可動域測定	手関節のROM測定を演習し、手技を習得できる		
8	関節可動域測定 総合演習 ②	関節可動域測定の復習を通じて、臨床に必要な技能を習得することができる		
9	股関節の可動域測定①	股関節のROM測定を演習し、手技を習得できる		
10	股関節の可動域測定②	股関節のROM測定を演習し、手技を習得できる		
11	膝関節の可動域測定	膝関節のROM測定を演習し、手技を習得できる		
12	足関節の可動域測定	足関節のROM測定を演習し、手技を習得できる		
13	体幹・頸部の可動域測定	体幹・頸部のROM測定を演習し、手技を習得できる		
14	関節可動域測定 総合演習 ④	関節可動域測定の復習を通じて、臨床に必要な技能を習得することができる		
15	関節可動域測定 総合演習 ⑤	関節可動域測定の復習を通じて、臨床に必要な技能を習得することができる		
16	関節可動域測定 総合演習 ⑥	関節可動域測定の復習を通じて、臨床に必要な技能を習得することができる		
17	筋力検査総合演習①	筋力とは何かを理解できる。徒手筋力検査（MMT）の概略、臨床的意義について概略を理解できる。		
18	肩関節の筋力検査	肩関節のMMT測定を演習し、手技を習得できる		
19	肩甲骨の筋力検査①	肩甲骨のMMT測定を演習し、手技を習得できる		

20	肩甲骨の筋力検査②	肩甲骨のMMT測定を演習し、手技を習得できる	
21	肘関節の筋力検査	肘関節のMMT測定を演習し、手技を習得できる	
22	手関節の筋力検査	手関節のMMT測定を演習し、手技を習得できる	
23	股関節の筋力検査①	股関節のMMT測定を演習し、手技を習得できる	
24	股関節の筋力検査②	股関節のMMT測定を演習し、手技を習得できる	
25	膝関節の筋力検査	膝関節のMMT測定を演習し、手技を習得できる	
26	足関節・足部の筋力検査	足関節のMMT測定を演習し、手技を習得できる	
27	体幹の筋力検査	体幹のMMT測定を演習し、手技を習得できる	
28	頸部の筋力検査	頸部のMMT測定を演習し、手技を習得できる	
29	筋力検査総合演習②	筋力検査の復習を通じて、臨床に必要な技能を習得することができる	
30	筋力検査総合演習③	筋力検査の復習を通じて、臨床に必要な技能を習得することができる	
教科書	<ul style="list-style-type: none"> ・新徒手筋力検査法（第9版） ・基礎運動学（第6版） ・理学療法評価学（標準理学療法学 専門分野） 	履修条件	30回の講義なので、7回以上欠席すると定期試験を受験できない
参考書	<ul style="list-style-type: none"> ・運動療法のための解剖学的触診技術上肢 ・運動療法のための解剖学的触診技術体幹下肢 	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・30回の講義のなかで、適宜小テスト（筆記・実技）を実施する ・小テストの結果と期末テストの結果を総合して成績に反映させる 		
備考			

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input type="checkbox"/> 講義 <input checked="" type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
理学療法評価学演習Ⅱ	工藤 達也 (実務経験教員)	2	2	前期
授業概要	評価の意義や目的、その一連の進め方について学習する。また、理学療法における基本的検査・測定技術であるバイタルサイン測定、形態測定、感覚・知覚検査、反射・病的反射、片麻痺機能検査、協調性検査、姿勢反射・バランス・平衡機能検査、筋緊張検査などを講義および演習を通して習得する。			
到達目標	理学療法評価を実施するために、各種検査法を理解し、実施することができる			
授業計画				
1	理学療法評価の意義・目的	理学療法評価の意義・目的やその流れと、その重要性について理解できる		
2	医療面接	医療面接の目的や流れ、コミュニケーション方法、質問方法などについて理解し、演習を通じて手技を習得できる		
3	ROM-T, MMTの総演習	ROM-T, MMTの総演習を通じて、臨床に必要な態度・技能・知識を習得できる		
4				
5	バイタルサイン測定	生命徴候であるバイタルサイン(血圧・脈拍・呼吸・体温)の測定の目的や方法、結果判定やその解釈などについて理解し、演習を通じて手技を習得できる		
6				
7	形態測定	四肢長および周径といった形態測定の目的や方法、結果判定やその解釈などについて理解し、演習を通じて手技を習得できる		
8				
9	表在感覚検査	体性感覚のひとつである表在感覚検査の目的や方法、結果判定やその解釈などについて理解し、演習を通じて手技を習得できる		
10				
11	深部感覚検査	体性感覚のひとつである深部感覚検査の目的や方法、結果判定やその解釈などについて理解し、演習を通じて手技を習得できる		
12				
13	総合演習①	バイタルサイン測定、形態測定、表在感覚検査、深部感覚検査の総演習を通じて、臨床に必要な態度・技能・知識を習得できる		
14				
15	反射検査	深部腱反射や表在反射、病的反射といった反射の検査の目的や方法、結果判定やその解釈などについて理解し、演習を通じて手技を習得できる		
16				
17	片麻痺機能検査①	片麻痺の運動機能回復の過程を評価するBrunnstrom Recovery Stage(BRS)や上田式12段階片麻痺機能検査の目的や方法、結果判定やその解釈などについて理解し、演習を通じて手技を習得できる		
18				

19		片麻痺の運動機能回復の過程を評価するBrunnstrom Recovery Stage(BRS)や上田式		
----	--	--	--	--

19	片麻痺機能検査②	12段階片麻痺機能検査の目的や方法，結果判定やその解釈などについて理解し，演習を通じて手技を習得できる	
20			
21	筋緊張検査	錐体路障害，錐体外路障害により出現する筋緊張異常の評価である筋緊張検査の目的や方法，結果判定やその解釈などについて理解し，演習を通じて手技を習得できる	
22			
23	協調性検査	運動失調を評価である協調性検査の目的や方法，結果判定やその解釈などについて理解し，演習を通じて手技を習得できる	
24			
25	姿勢反射・ バランス機能検査	外乱による姿勢反射や平衡機能の反応，パフォーマンスとしてのバランス検査の目的や方法，結果判定やその解釈などについて理解し，演習を通じて手技を習得できる	
26			
27	脳神経検査	脳神経の解剖や機能について把握し，各検査の意義や方法について理解することができる	
28			
29	総合演習②	反射検査，片麻痺機能検査，協調性検査，バランス機能検査の総演習を通じて，臨床に必要な態度・技能・知識を習得できる	
30			
教科書	理学療法評価学（標準理学療法学 専門分野）	履修条件	30回の講義なので，7回以上欠席すると定期試験を受験できない
参考書	神経診察クローズアップ 第3版 看護がみえるvol.3 フィジカルアセスメント	留意事項等	できるだけ欠席せず，予習復習を怠らないこと
成績評価	30回の講義のなかで，適宜小テスト(筆記・実技)を実施する。 授業参加への積極性と小テストの結果，定期テストの結果を総合して成績に反映させる。		
備考	毎時間，実技を行うので，動きやすい服装で授業に臨むこと		

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input type="checkbox"/> 講義 <input checked="" type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
理学療法評価学演習Ⅲ	外館 光平 (実務経験教員)	2	2	後期
授業概要	これまで修得した知識を整理し、技能の向上および患者とのコミュニケーション、知識の具現化を図る。なお、演習では学内において臨床現場を想定した医療面接や検査測定に関する客観的臨床能力試験（以下、OSCE）を実施する。			
到達目標	これまで学内で修得してきた知識ならびに技術の総まとめを行うとともに、臨床に即した医療面接や検査測定手技の応用について学び、臨床実習を円滑に実施できるようになる。			
授業計画				
1	オリエンテーション①	理学療法における評価の流れと、その重要性について理解することができる		
2	オリエンテーション②			
3	評価の解釈①			
4	評価の解釈②			
5	評価の解釈③			
6	評価の解釈④			
7	筋力検査①	関節可動域測定の実施方法を習得し、その判定や解釈について理解することができる		
8	筋力検査②			
9	筋力検査③	頭頸部のMMTの演習を通して、その手技を習得できる		
10	筋力検査④			
11	評価の解釈⑤	体幹部のMMTの演習を通して、その手技を習得できる		
12	評価の解釈⑥			
13	評価の解釈⑦			
14	評価の解釈⑧			
15	評価の解釈⑨	筋力検査(徒手筋力検査法)の実施方法を習得し、その判定や解釈について理解することができる		
16	評価の解釈⑩	バイタルサインの測定、フィジカルアセスメントの実施方法を習得し、その判定や解釈について理解することができる		
17	評価の解釈⑪	形態測定、骨のランドマークの触診の実施方法を習得し、その判定や解釈について理解することができる		
18	評価の解釈⑫			
		筋の触診方法を習得し、その判定や解釈について理解することができる		

19	評価の解釈⑬	筋緊張検査、腱反射、感覚検査の実施方法を習得し、その判定や解釈について理解することができる	
20	評価の解釈⑭	バランス評価、片麻痺機能検査の実施方法を習得し、その判定や解釈について理解することができる	
21	姿勢・動作分析①	起居動作のバイオメカニクスと理解することができ、実際の患者の姿勢・動作観察および分析と、その内容について記載することができる	
22	姿勢・動作分析②		
23	姿勢・動作分析③	起立・着座動作のバイオメカニクスと理解することができ、実際の患者の姿勢・動作観察および分析と、その内容について記載することができる	
24	姿勢・動作分析④		
25	歩行評価①	歩行動作のバイオメカニクスを理解することができ、実際の患者の姿勢・動作観察および分析と、その内容について記載することができる	
26	歩行評価②		
27	歩行評価③	代表的な疾患の患者の異常歩行の観察・分析を実践し、その内容について記載することができる	
28	歩行評価④		
29	総合演習①	整形外科疾患、中枢神経疾患、内部疾患についての代表的な疾患に対して、実施すべき評価項目の列挙、実施計画の立案を行い、実際に実施することができる	
30	総合演習②		
教科書	理学療法評価学第6版補訂版 (金原出版)	履修条件	30回の講義なので、7回以上欠席すると定期試験を受験できない
参考書	神経診察クローズアップ 第3版 講義内で適宜参考資料を配布する	留意事項等	実技練習は適宜行うこと
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・30回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる 		
備考			

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input type="checkbox"/> 講義 <input checked="" type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
理学療法研究法	外館 洸平 (実務経験教員)	1	1	後期
授業概要	理学療法における研究方法について意義を知り、その方法を理解できるよう講義演習を行う			
到達目標	理学療法における研究方法について意義を知り、その方法を理解できる			
授業計画				
1	研究とは	理学療法分野における研究の必要性、研究の概要について		
2	EBM, EBPT	Evidence Based Medicine(Physical Therapy)の概要について		
3	文献検索	研究の実践・EBMの実践に必要な情報の種類と、その収集方法について		
4	研究デザイン ①	研究の実験デザインや方法について理解する		
5	研究デザイン ②	研究の実験デザインや方法について理解する		
6	研究デザイン ③	研究の実験デザインや方法について理解する		
7	研究の批判的吟味 ①	研究論文から得られる情報の是非を吟味することができる		
8	研究の批判的吟味 ②	研究論文から得られる情報の是非を吟味することができる		
9	研究の実際 ①	医学研究の一連の流れについて理解できる		
10	研究の実際 ②	研究計画書の作成のポイントを理解することができる		
11	研究倫理	医学研究に必要な倫理について理解することができる		
12	研究の批判的吟味 ③	研究論文から得られる情報の是非を吟味することができる		
13	研究の批判的吟味 ④	研究論文から得られる情報の是非を吟味することができる		
14	研究の批判的吟味 ⑤	研究論文から得られる情報の是非を吟味ことができ、研究論文の概要を他者に伝えるようにまとめて発表することができる		
15	研究の批判的吟味 ⑥	研究論文から得られる情報の是非を吟味ことができ、研究論文の概要を他者に伝えるようにまとめて発表することができる		
教科書	資料を配布する	履修条件	15回の講義なので、4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	医療系研究論文の読み方・まとめ方・論文のPECOから正しい統計的判断まで,東京図書株式会社,2011	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	・ 中間テスト、課題レポート(中間・期末)の結果を総合して成績に反映させる			
備考				

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input checked="" type="checkbox"/> 講義 <input type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
神経障害理学療法治療学	平塚 健太 (実務経験教員)	1	2	後期
授業概要	リハビリテーションの中核的対象となる神経障害について深く学び、治療技術を臨床に反映できるよう実践的な内容を学ぶ			
到達目標	様々な神経症候を医学的に解釈・統合し具体的な治療に反映できるようになる			
授業計画				
1	脳卒中と随意運動障害	随意運動のメカニズムと障害が生じる脳画像について理解できる		
2	随意運動障害に対する理学療法1	脳卒中患者に起因する随意運動の障害に対する理学療法を理解できる		
3	随意運動障害に対する理学療法2	脳卒中患者に起因する随意運動の障害に対する理学療法を理解できる		
4	随意運動障害に対する理学療法3	脳卒中患者に起因する随意運動の障害に対する理学療法を理解できる		
5	感覚障害に対する理学療法	脳卒中患者に起因する感覚障害の障害と理学療法を理解できる		
6	脳卒中の評価 1	脳卒中患者に特有の評価を理解できる		
7	脳卒中の評価 2	脳卒中患者に特有の評価を理解し、実践できる		
8	脳卒中の評価 3	脳卒中患者に特有の評価を理解し、実践できる		
9	脳卒中の評価 4	脳卒中患者に特有の評価を理解し、実践できる		
10	脳卒中の歩行障害 1	脳卒中患者に特有の歩行を理解できる		
11	脳卒中の歩行障害 2	脳卒中の歩行障害に対する理学療法を理解できる		
12	姿勢障害に対する理学療法	姿勢定位障害に対する理学療法を理解できる		
13	パーキンソン病の理学療法	パーキンソン病に対する評価と治療を理解できる		
14	神経筋疾患の理学療法	神経筋疾患に対する評価と治療を理解できる		
15	脊髄損傷	脊髄損傷に対する評価と治療を理解できる		
教科書	神経障害理学療法学Ⅰ (15レクチャーシリーズ 理学療法テキスト) 神経障害理学療法学Ⅱ (15レクチャーシリーズ 理学療法テキスト)	履修条件	15回の講義なので、4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	適宜	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・15回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる 			
備考				

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input type="checkbox"/> 講義 <input checked="" type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
物理療法学演習	外館 洸平 (実務経験教員)	1	1	後期
授業概要	種々の物理療法の原理、生体に与える生理学的作用、実施上の適応と禁忌、物理療法プログラムの実際を理解する			
到達目標	・各種物理的エネルギーが生体に及ぼす生理学的作用、リスク管理について学び、説明できる ・基本的な物理療法機器を操作を習得し、実践できる			
授業計画				
1	物理療法総論・リスク管理	物理療法の概要、物理療法におけるリスク管理について理解することが出来る		
2	温熱療法 ①	温熱療法の定義・分類、温熱療法の基礎と生理学的作用、ホットパック・パラフィンの適応・禁忌・実施の流れについて理解することが出来る		
3	温熱療法 ②	超短波療法・極超短波療法の適応・禁忌・実施の流れについて理解することが出来る		
4	温熱療法 ③	超音波療法の適応・禁忌・実施の流れについて理解することが出来る		
5	寒冷療法	寒冷療法の定義・分類、寒冷療法の基礎と生理学的作用、寒冷療法の適応・禁忌・実施の流れについて理解することが出来る		
6	水治療法	水治療法の定義・分類、水治療法の基礎と生理学的作用、水治療法の適応・禁忌・実施の流れについて理解することが出来る		
7	演習①	温熱療法、寒冷療法、水治療法の実際（機器の使い方）		
8	光線療法 ①	光線療法の定義・分類、光線療法の基礎と生理学的作用、レーザー療法の適応・禁忌・実施の流れについて理解することが出来る		
9	光線療法 ②	赤外線療法、紫外線療法の適応・禁忌・実施の流れについて理解することが出来る		
10	電気刺激療法 ①	電気刺激療法の定義・分類・基礎と生理学的作用について理解することが出来る		
11	電気刺激療法 ②	経皮的電気神経刺激、干渉波刺激の適応・禁忌・実施の流れについて理解することが出来る		
12	電気刺激療法 ③	神経筋電気刺激、機能的電気刺激の適応・禁忌・実施の流れについて理解することが出来る		
13	牽引療法	牽引療法の定義・分類、牽引療法の基礎と生理学的作用、牽引療法の適応・禁忌・実施の流れについて理解することが出来る		
14	マッサージ療法	マッサージ療法の定義・分類、マッサージ療法の基礎と生理学的作用、マッサージ療法の適応・禁忌・実施の流れについて理解することが出来る		
15	演習②	光線療法、電気刺激療法、牽引療法、マッサージ療法の実際（機器の使い方、実技）		
教科書	PT・OTビジュアルテキスト エビデンスから身につける物理療法	履修条件	15回の講義なので、4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	最新理学療法学講座 物理療法学、医歯薬出版株式会社 Crosslink理学療法学テキスト 物理療法学、メジカルビュー社	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	・15回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる			
備考				

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input checked="" type="checkbox"/> 講義 <input type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
運動療法学	工藤 達也 (実務経験教員)	1	2	前期
授業概要	本科目では、関節可動域制限や筋力低下といった基本的な運動障害の原因について理解するとともに各種運動療法を実施するうえで必要となる基礎理論について学習し、基本的な運動療法について実技演習を行う			
到達目標	基本的な運動障害の原因を理解し、目的に応じた運動療法を選択および実施できるよう、基本的な知識、技術を身につけることができる			
授業計画				
1	総論	運動療法の定義や目的、適応および運動療法上のリスク管理について理解できる		
2	運動学習①	中枢神経系による運動制御機構および運動学習理論について理解できる		
3	運動学習②	運動療法における運動学習の応用方法について理解できる		
4	関節構造と運動	基本的な関節構造と関節運動、関節運動に制限を及ぼす病態について理解できる		
5	関節可動域訓練	関節可動域訓練の目的や種類、基本的手技について演習を通じて理解できる		
6	ストレッチング	ストレッチングの理論や目的、種類、基本的手技について演習を通じて理解できる		
7	筋力と運動	骨格筋の構造と各収縮様式の特徴、筋力増強のメカニズムについて理解できる		
8	筋力増強訓練	筋力増強訓練の目的や各収縮様式に応じた基本的手技について演習を通じて理解できる		
9	生体反応と運動	運動が呼吸・循環・代謝に与える影響および持久力の概念について理解できる		
10	持久力増強運動	全身持久力トレーニングの原則やその効果、実施方法について演習を通じて理解できる		
11	協調性と運動	協調性運動のメカニズム、協調性運動障害を来す疾患とその症状について理解できる		
12	協調性訓練	協調性訓練の目的や各種手技について理解できる		
13	バランスと運動	バランスに関連する要素および姿勢調節障害の分類とその特徴について理解できる		
14	バランス訓練	姿勢・バランス障害に対する運動療法について実技演習を通じて理解できる		
15	高齢者に対する運動療法	加齢に伴う機能低下と転倒の関連および加齢による機能障害に対する運動療法について理解できる		
教科書	運動療法学-障害別アプローチの理論と実際-第2版	履修条件	15回の講義なので、4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	講義内で適宜参考資料を配布する	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	15回の講義のなかで、適宜小テストを実施する。 小テストの結果と定期テストの結果および課題の成績を総合して成績に反映させる。			
備考	適宜、実技を行うので、動きやすい服装で授業に臨むこと			

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input checked="" type="checkbox"/> 講義 <input type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
補装具学	鈴木 康裕 (実務経験教員)	1	2	前期
授業概要	補装具の目的・機能・適応について理解し、生活支援や環境制御に有効な一つの手法であることを理解する。			
到達目標	各種の障害と照らし合わせて補装具の機能やその具体的な用途について説明できるようになる。			
授業計画				
1	装具学総論	装具の目的と装具を理解するために必要な運動学について理解できる。		
2				
3	短下肢装具	短下肢装具の機能と適応について理解できる。		
4				
5	長下肢装具	長下肢装具の機能と適応について理解できる。		
6	靴型装具	靴型装具の機能と適応について理解できる。		
7	上肢装具	肩・肘・手・指関節の装具・スプリントの機能と適応について理解できる。		
8	体幹装具	頸部・胸部・腰部の装具の機能と適応について理解できる。		
9	疾患特有の装具	疾患特有の装具の機能と適応について理解できる。		
10	装具学 まとめ	装具の目的、機能、適応について理解できる。		
11	義肢学総論	義肢の目的と義肢を理解するために必要な運動学について理解できる。		
12	断端評価・管理	切断術後の断端評価と断端管理について理解できる。		
13	切断者の リハビリテーション	切断手術・合併症・リハビリテーションについて理解できる。		
14	下腿義足	下腿義足の名称、構造と機能、その適応について理解できる。		
15				
教科書	『シンプル理学療法学シリーズ 義肢装具学テキスト 改訂第3版 (南江堂)』	履修条件	15回の講義なので、4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	講義内で適宜提示	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	・15回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テスト・中間テスト・期末テストの結果を総合して成績に反映させる			
備考	医療物理学・運動学・運動学演習を復習して講義に臨むこと			

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input checked="" type="checkbox"/> 講義 <input type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
日常生活活動学	羽澤 晃士 千葉 馨 (実務経験教員)	1	2	前期
授業概要	疾患や障害への理解を深め、それぞれの特徴に適した日常生活活動や介助方法について掘り下げて学習することを目的とする			
到達目標	疾患や障害への理解を深めるとともに、一般的な動作パターンやその介助方法、車いすや自助具などの操作方法について理解することができる			
授業計画				
1	ADLの概念 総論①	ADLの概念、QOLやICFとの関連について理解することができる		
2	ADLの分類 総論②	基本的日常生活活動（BADL）、手段的日常生活活動（IADL）、生活関連活動（APDL）について理解することができる		
3	ADLの評価方法	BI（できるADL）、FIM（しているADL）について理解することができる		
4	脊髄損傷①	四肢麻痺の機能障害の概要について理解することができる		
5	脊髄損傷②	四肢麻痺のADLの特徴や評価・介助方法、練習指導について、車いすや自助具などの名称や操作方法を通して理解することができる		
6	脊髄損傷③			
7	脊髄損傷④	対麻痺の機能障害の概要について理解することができる		
8	脊髄損傷⑤	対麻痺のADLの特徴や評価・介助方法、練習指導について、車いすや自助具などの名称や操作方法を通して理解することができる		
9	脊髄損傷⑥			
10	脳卒中片麻痺①	脳卒中の機能障害の概要について理解することができる		
11	脳卒中片麻痺②	脳卒中のADLの特徴や評価・介助方法、練習指導について、車いすや自助具などの名称や操作方法を通して理解することができる		
12	脳卒中片麻痺③			
13	リウマチ①	リウマチの機能障害の概要について理解することができる		
14	リウマチ②	リウマチのADLの特徴や評価・介助方法、練習指導について、車いすや自助具などの名称や操作方法を通して理解することができる		
15	リウマチ③			
教科書	PT・OTビジュアルテキスト ADL	履修条件	15回の講義なので、4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	・標準理学療法学 日常生活活動学・生活環境学 ・脳卒中の機能評価 -SIASとFIM[基礎編]等	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	・15回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる			
備考				

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input type="checkbox"/> 講義 <input checked="" type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
日常生活活動学演習	羽澤 晃士 (実務経験教員)	1	2	後期
授業概要	各疾患や障害の動作に対して分析的に観察し、表出することができ、治療的に系統立てた考えを持つことができるよう講義演習を行う			
到達目標	各疾患や障害の動作に対して分析的に観察し、表出することができ、治療的に系統立てた考えを持つことができる			
授業計画				
1	動作分析とは ①	動作分析について理解し、分析的な視点を持つことができる		
2	動作分析とは ②	動作分析について理解し、分析的な視点を持つことができる		
3	姿勢について	姿勢について理解し、分析的な視点を持つことができる		
4	座位について	座位について理解し、分析的な視点を持つことができる		
5	立位について	立位について理解し、分析的な視点を持つことができる		
6	寝返り	寝返りについて理解し、分析的な視点を持つことができる		
7	起き上がり	起き上がりについて理解し、分析的な視点を持つことができる		
8	立ち上がり 座位から	座位からの立ち上がりについて理解し、分析的な視点を持つことができる		
9	立ち上がり 床から	床からの立ち上がりについて理解し、分析的な視点を持つことができる		
10	歩行 ①	歩行について理解し、分析的な視点を持つことができる		
11	歩行 ②	歩行について理解し、分析的な視点を持つことができる		
12	ADL動作 ①	ADL動作について理解し、分析的な視点を持つことができる		
13	ADL動作 ②	ADL動作について理解し、分析的な視点を持つことができる		
14	症例検討 ①	症例検討で動作分析をはじめとした評価を行い治療計画ができる		
15	症例検討 ②	症例検討で動作分析をはじめとした評価を行い治療計画ができる		
教科書	PT・OTビジュアルテキスト ADL	履修条件	15回の講義なので、4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	・標準理学療法学 日常生活活動学・生活環境学 ・脳卒中の機能評価 -SIASとFIM[基礎編]等	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	・15回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる			
備考				

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input checked="" type="checkbox"/> 講義 <input type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
高次脳機能障害学	外館 洸平 (実務経験教員)	1	2	前期
授業概要	様々な原因で生じる高次脳機能についての知識を習得し、症状別のリハビリテーションについて考えることができるように講義および評価演習を行う。			
到達目標	高次脳機能障害についての知識と、それに付随する神経系の構造・機能を理解でき、症状別のリハビリテーションについて考えることができる。			
授業計画				
1	高次脳機能障害学総論	高次脳機能障害とはなにか、リハビリテーションの流れについて理解できる		
2	脳の構造と働き	脳の構造と部位ごとの働きについて理解できる		
3	大脳の機能局在と障害	大脳の機能局在と、各部位が障害された場合の症状の概要を理解できる		
4	脳画像読影	高次脳機能障害に関連するCT、MRI画像を読影することができる		
5	空間認知障害①	半側空間無視を中心に、空間認知障害の発生メカニズムを理解できる		
6	空間認知障害②	半側空間無視の評価と介入について理解できる		
7	空間定位障害	Pusher現象を中心に、空間定位障害の発生メカニズムと評価、介入を理解できる		
8	遂行機能障害	遂行機能障害の症状と評価、介入の際の注意点を理解できる		
9	情動・社会的行動障害	情動・社会的行動障害の症状と評価、介入の際の注意点を理解できる		
10	注意障害・記憶障害	注意障害・記憶障害の症状と評価、介入の際の注意点を理解できる		
11	失行	失行の分類と評価、介入の際の注意点を理解できる		
12	失認	失認の分類と評価、介入の際の注意点を理解できる		
13	失語	失語の分類と評価、介入の際の注意点を理解できる		
14	認知症	認知症の分類と評価、介入の際の注意点を理解できる		
15	社会制度	高次脳機能障害の支援に必要な社会制度について理解できる		
教科書	高次脳機能障害学 第3版 医歯薬出版	履修条件	15回の講義なので、4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	必要に応じて提示する	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	・小テスト、期末テストの結果を総合して成績に反映する			
備考				

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input type="checkbox"/> 講義 <input checked="" type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
コミュニケーション方法論演習	平塚 健太 (実務経験教員)	1	1	後期
授業概要	現在はコミュニケーションの方法は多様化している それぞれのコミュニケーション方法についての使用例から、さらに社会人としての伝達方法であるプレゼン、レポート、レジュメ作成までを理解し、実施できるように学んでほしい(手紙の書き方も含める)			
到達目標	それぞれのコミュニケーション方法についての使用例から、さらに社会人としての伝達方法であるプレゼン、レポート、レジュメ作成までを理解し、実施できる			
授業計画				
1	コミュニケーションとは	コミュニケーションの定義と必要性を理解できる		
2	コミュニケーションの種類	様々なコミュニケーション方法について提示し、適用と適用外について述べる		
3	傾聴と質問	話の聞き方および質問の仕方を理解できる		
4	会話のルールと質問の仕方	会話のルールやマナー・良質な質問を理解し、実践できる		
5	異文化コミュニケーションと他者理解	様々な価値観を受け入れ、価値観を共有することができる		
6	レポートの書き方	レポートの書き方について理解し、実践できる		
7	資料の作り方とプレゼンテーション①	相手に伝わりやすい資料の作り方・プレゼンテーションを理解できる		
8	資料の作り方とプレゼンテーション②	相手に伝わりやすい資料の作り方・プレゼンテーションを理解し、実践できる		
教科書	資料を配布する	履修条件	pcを使用する 15回の講義なので4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	適宜	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	・15回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる			
備考				

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input checked="" type="checkbox"/> 講義 <input type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
理学療法管理学Ⅰ	平塚 健太 (実務経験教員)	1	2	前期
授業概要	業務を実施するにあたり、リスクマネジメントや組織運営の観点からの個人の在り方までメタ認知を高めて行動できるよう講義を行う			
到達目標	業務を実施するにあたり、リスクマネジメントや組織運営の観点から、職場における個人の在り方について考えることができる			
授業計画				
1	リハビリテーション管理学 総論	リハビリテーション管理学の概念や背景について理解できる		
2	医療機関の分類と組織	医療機関の分類や組織構成・役割について理解できる		
3	医療保険と介護保険	理学療法業務に必要な医療保険・介護保険・社会保障について理解できる		
4	診療・介護報酬制度	リハビリテーション分野における収益構造を理解できる		
5	組織と業務・労務管理	組織やチーム・人事考課や労働基準法について理解し、考えを述べるができる		
6	リスク管理	医療安全・感染症管理・クレーム対応などのリスク管理を理解できる		
7	卒前・卒後教育	生涯学習に至る教育体制や内容を理解し、考えを述べるができる		
8	リーダーシップ・ マネジメント	管理職としてあるべき姿勢を理解できる		
教科書	リハビリテーション管理・運営実践ガイドブック	履修条件	15回の講義なので、4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	適宜提示	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	・15回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる			
備考				

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input checked="" type="checkbox"/> 講義 <input type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
理学療法管理学Ⅱ	山田 竜大 (実務経験教員)	1	2	後期
授業概要	管理・マネジメントについて職場から症例について範囲を広げて考えることができよう講義を行う			
到達目標	理学療法士の臨床現場における管理・マネージメント，リスク管理について，視野を広げて考えることができる			
授業計画				
1	総論	理学療法管理学Ⅱの位置づけや到達目標を理解できる		
2	組織	組織やチームについて理解し、考えを述べるができる		
3	業務管理・労務管理	人事考課・時間外労働などの仕組みやハラスメント等について理解できる		
4	リスク管理	医療安全・感染症管理・クレーム対応などのリスク管理を理解できる		
5	臨床実習教育	臨床実習の学習目的や内容を理解できる		
6	卒前・卒後教育①	生涯学習に至る教育体制や内容を理解できる		
7	卒前・卒後教育②	生涯学習に至る教育体制や内容を理解し、考えを述べるができる		
8	リーダーシップ・マネジメント	管理職としてあるべき姿勢を理解できる		
教科書	検討中	履修条件	8回の講義なので、3回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	検討中	留意事項等	できるだけ欠席せず，予習復習を怠らないこと	
成績評価	・8回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる			
備考				

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input type="checkbox"/> 講義 <input checked="" type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
地域理学療法演習Ⅱ	溝部 和 (実務経験教員)	1	1	後期
授業概要	地域リハビリテーションを展開するうえで必要不可欠な基本的動作を実践的な立場から論じ、演習を通じて理解を深める			
到達目標	具体的な在宅リハビリテーションの業務を理解し、実際の現場で使用できるようにする			
授業計画				
1	基本動作 起居①	起居活動の制限に対する地域理学療法介入の目的を理解できる		
2	基本動作 起居②	寝返り動作の基本パターンを理解し援助方法を習得する		
3	基本動作 起居③	起き上がり動作の基本パターンを理解し援助方法を習得する		
4	基本動作 起居④	起立動作の基本パターンを理解し援助方法を習得する		
5	基本動作 起居⑤	移乗動作の基本パターンを理解し援助方法を習得する		
6	基本動作 移動①	屋内外での移動制限に対する地域理学療法介入の目的を理解できる		
7	基本動作 移動②	歩行動作に対する援助方法を習得する		
8	在宅でのADL①	ADLに注目した地域理学療法介入の目的を理解できる		
9	在宅でのADL②	排泄動作や入浴動作に対する援助方法を習得する		
10	総合演習	各動作の援助方法についての総復習		
11	QOLのアプローチ	QOLの評価、QOLの向上を目的とした理学療法士の取り組みなどを理解できる		
12	臨床的な判断	緊急性が高い状況とは何かが理解できる		
13	在宅リハでのPE・PA	フィジカルイグザミネーション (PE) とフィジカルアセスメント (PA) の概略を理解できる		
14	多職種連携	フィジカルアセスメントで得た情報をどのように活用するかを理解できる		
15	記録と報告	在宅リハにおける記録・報告業務、多職種への情報提供などの意義と方法について理解できる		
教科書	資料を配布する	履修条件	15回の講義なので、4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	検討中	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・15回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と中間テスト、定期テストの結果を総合して成績に反映させる 			
備考	<ul style="list-style-type: none"> ・実技が中心となるため、動きやすい服装で講義に望むこと 			

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input type="checkbox"/> 講義 <input checked="" type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
地域理学療法演習Ⅲ	溝部 和 (実務経験教員)	1	2	前期
授業概要	地域理学療法演習Ⅱで学習した基礎的な内容をふまえ、具体的な臨床技術を演習の中で経験させ、在宅リハにおける理学療法士の臨床活動について論じる			
到達目標	様々な対象者の症状を医学的にとらえ、在宅リハビリテーションにおけるセラピストの活動が理解できるようになる			
授業計画				
1	フィジカルアセスメント 総論 ①	フィジカルアセスメント (PA) の概要を理解することができる		
2	フィジカルアセスメント 総論 ②	フィジカルイグザミネーション (PE) とフィジカルアセスメント (PA) の違いや得た情報を統合して評価 (解釈) する流れを掴むことができる		
3	バイタルサイン	バイタルサイン (体温・脈拍・血圧・呼吸) を計測する意義や方法について理解することができる		
4	歩行	地域に出て歩くの問題点を考える		
5	車椅子 ①	車椅子操作に関して		
6	車椅子 ②	地域に出て車椅子駆動や車いす生活の問題点を考える		
7	地域の考え方とリスクマネジメント	高齢者が地域で生活を継続する為の視点を学び、それに伴うリスクマネジメントを理解することができる		
8	多職種連携と職域	地域でかかわる多職種を理解することで、セラピストの役割を理解できる		
9	地域の職域と介護保険制度	地域での活動内容から広域な職域を理解し、それに必要な介護保険の基本理念などを理解できる		
10	介護保険制度による住環境整備Ⅰと使用方法	介護保険制度を利用した住環境の整備を学び、ADL、QOLの向上に結びつける事が出来る。また車椅子やベッドマットの使用方法を理解できる。		
11	介護保険制度による住環境整備Ⅱ	介護保険制度を利用した住環境の整備を学び、ADL、QOLの向上に結びつける事が出来る		
12	介護保険制度による住環境整備Ⅲ	介護保険制度を利用した住環境の整備を学び、ADL、QOLの向上に結びつける事が出来る。また歩行器等の使用方法を理解できる。		
13	介護保険制度による住環境整備Ⅳ	介護保険制度を利用した住環境の整備を学び、ADL、QOLの向上に結びつける事が出来る		
14	地域での介護予防に関して	地域で行われておる介護予防を理解し、今後を考察する		
15	地域での介護予防に関して	地域で行われておる介護予防を理解し、今後を考察する		
教科書	フィジカルアセスメントがみえる	履修条件	15回の講義なので、4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	リハビリテーションリスク管理ハンドブック 訪問リハ危険予知トレーニング	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	・15回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる			
備考				

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input type="checkbox"/> 講義 <input checked="" type="checkbox"/> 演習 <input type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
理学療法総論Ⅰ	平塚 健太、成田 大一、羽澤晃士、 工藤 達也、外館 光平、鈴木 康裕 (実務経験教員)	1	3	前期
授業概要	臨床実習前の演習として、心構えや知識技術の補完をする			
到達目標	実習の心構えを自覚し、理学療法士としての基礎的な臨床技能を確立する			
授業計画				
1	理学療法評価演習 ①	インテークから情報収集、評価や治療の立案概要を理解できる		
2	理学療法評価演習 ②	神経学的検査、運動器の評価など、身体機能の評価を復習し、実践的な技能を身につける		
3	理学療法評価演習 ③			
4	ADLへの介入 ①	基本動作の評価、治療的介入法を復習し、実践的な技能を身につける		
5	ADLへの介入 ②			
6	歩行 ①	正常歩行の分析（歩容や定量的な分析）から評価基準を推定できる		
7	歩行 ②	各種の異常歩行の分析から、歩行訓練の方法を導き出せる		
8	運動療法 ①	各種の障害に対する運動療法を演習の中で学習し、実践的な能力を習得する		
9	運動療法 ②			
10	運動療法 ③			
11	運動療法 ④			
12	物理療法 ①	各症状に対応する物理療法を復習し、各効能を理解する		
13	物理療法 ②	演習を通じて、治療器具の扱い方や禁忌事項などについて理解を深める		
14	総括 ①	診療記録の作成の方法、リハビリテーションカンファレンスへの対応など、実践的な演習の中で理学療法士としてのアイデンティティを高める		
15	総括 ②	既習の学習内容を総括し、各領域の理学療法士の役割について理解を深める		
教科書	既存の教科書を適宜使用する		履修条件	15回の講義なので、4回以上欠席すると定期試験を受験できない
参考書	検討中		留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと
成績評価	・15回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる			
備考				

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input checked="" type="checkbox"/> 講義	<input type="checkbox"/> 演習	<input type="checkbox"/> 実習
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
理学療法学総論Ⅱ	平塚 健太、成田 大一、羽澤晃士、 工藤 達也、外館 洸平、鈴木 康裕 (実務経験教員)	2	3	後期
授業概要	3年間の集大成として学べるよう講義を展開する			
到達目標	治療技術に直接活かせるような基礎・臨床医学の知識，理学療法専門分野の知識を再学習し，臨床能力を高め，その成果を国家試験対策に反映させることができる			
授業計画				
1	基礎・臨床医学領域： 骨格系の構造と機能 ①	骨の発生学，微細構造，形状，骨機能，骨疾患について理解できる		
2	基礎・医学領域 骨格系の構造と機能 ②	関節の形状とその動き，運動器疾患について理解できる		
3	基礎・臨床医学領域 筋の構造と機能 ①	筋の種類，収縮のメカニズム，エネルギー代謝・筋疾患などを理解できる		
4	基礎・臨床医学領域 筋の構造と機能 ②	筋の支配神経，神経筋接合部の機能，関節運動と筋収縮の関係などを理解できる		
5	基礎・臨床医学領域 神経系 ①	中枢神経の構造と機能，中枢神経障害による病態について理解できる		
6	基礎・臨床医学領域 神経系 ②	末梢神経の構造と機能，末梢神経障害による病態について理解できる		
7	基礎・臨床医学領域 神経系 ③	脊髄疾患，脊髄損傷の病態，自律神経の構造と機能について理解できる		
8	基礎・臨床医学領域 内臓系 ① 呼吸循環器	呼吸器・循環器構造と機能，それらの障害を惹起する代表的な疾患について理解できる		
9	基礎・医学領域 内臓系 ② 消化器	消化器に分類される臓器の構造と機能，代表的な疾患について理解できる		
10	基礎医学領域 内臓系 ③ 排泄	腎臓・膀胱の構造と機能，代表的な疾患とその症状について理解できる		
11	基礎・臨床医学領域 内分泌系	内分泌器官の構造と機能，代表的な疾患とその症状について理解できる		
12	基礎・臨床医学領域 先天性疾患	様々な遺伝病，周産期異常など，代表的な先天性疾患の症状について理解できる		
13	基礎・臨床医学領域 精神医学 ①	精神障害領域の疾患と治療について理解できる		
14	基礎・臨床医学領域 精神医学 ②	てんかん，認知症について理解できる		
15	基礎・臨床医学領域 小児科学領域	発達障害も含め小児科領域の疾患について理解できる		
16	基礎・臨床医学領域 臨床心理学	防衛機制，心理療法，各種検査について理解できる		
17	基礎・臨床医学領域 リハビリテーション医学	障害分類（ICF），障害受容，ユニバーサルデザインなどについて理解できる		

18	基礎・臨床医学領域 制度関連	理学療法士・作業療法士法，介護保険などの法制・制度を理解できる	
19	基礎・臨床医学領域 公衆衛生	感染予防，医療制度など，臨床現場に即した知識を習得する	
20	基礎・臨床医学領域 診断学 ①	脳の画像診断学について理解できる	
21	基礎・臨床医学領域 診断学 ②	胸部，腹部，四肢の画像診断学について理解できる	
22	基礎・臨床医学領域 診断学 ③	異常心電図の判読，心疾患の診断について理解する	
23	基礎・臨床医学領域 臨床薬理学	様々な症状に適応する薬剤について理解できる	
24	基礎・臨床医学領域 生化学検査	生化学的検査による正常基準と異常所見を惹起する疾患について理解できる	
25	基礎・臨床医学領域 PE・PA	フィジカルアセスメントに関連する各事項について理解できる	
26	専門領域 ①	運動器障害領域の理学療法について，その目的と方法を理解できる	
27	専門領域 ②	神経障害領域の理学療法について，その目的と方法を理解できる	
28	専門領域 ③	発達障害領域の理学療法について，その目的と方法を理解できる	
29	専門領域 ④	老年期障害領域の理学療法について，その目的と方法を理解できる	
30	まとめ	理学療法の源流となる各種の理論について，理解を深める	
教科書	既存の教科書を適宜使用する	履修条件	30回の講義なので，7回以上欠席すると定期試験を受験できない
参考書	検討中	留意事項等	できるだけ欠席せず，予習復習を怠らないこと
成績評価	・30回の講義の中で数回小テストを行い，模擬試験の結果も勘案したうえで，各々の成績の合算により総合的に判定する		
備考			

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input type="checkbox"/> 講義 <input type="checkbox"/> 演習 <input checked="" type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
臨床実習Ⅰ	羽澤 晃士 (実務経験教員)	1	1	後期
授業概要	臨床教育者のクリニカルクラークシップの要領による指導により、病院・施設における理学療法士の臨床活動を見学する			
到達目標	実習施設における職員の連携の様子を見学し、また、実際に患者や利用者に関わる中で、障害像や理学療法士の職務について理解を深めることができる			
授業計画				
1	<p>1単位（40時間）で行う臨床実習Ⅰ（見学実習）を通して、理学療法士の職務について理解を深める。臨床場面における理学療法士の活動、他のリハビリテーション関連職種との連携業務を見学し、リハビリテーション業務の全体像を理解する。また、臨床教育者の指導により、患者（利用者）と個別にコミュニケーションをとり、大まかな障害像を把握できるように学習する。</p> <p>本実習では、それぞれ臨床実習前の評価及び臨床実習後の評価を行う。</p> <p>臨床実習前の評価（8時間）により、どのような態度・視点で見学実習に臨めば目標を達成できるのかを学ぶ。患者（利用者）との接し方、臨床教育者とのコミュニケーションのとりかた、当該実習施設の役割や使命、リハビリテーション部門の大まかな業務の流れ（処方・評価・治療など）、理学療法士の具体的な業務、などを事前に学習し、自分で本実習の目標を立てることができるようになる。</p> <p>臨床実習後の評価（8時間）では、臨床実習Ⅰで学び得たことを発表し、他の学生からの質疑を通して到達目標を達成できたかを確認する。</p>			
2				
3				
4				
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
14				
15				
	既存の教科書を適宜使用する	履修条件	全日程の1/5以上欠席すると単位を認定しない	
参考書	既存の教科書、ノート、ジャーナルなどの参考資料を有効に利用すること	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	臨床実習前の評価、臨床実習後の評価、実習記録、課題等の成果物などを総合的に判断し評価する			
備考				

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input type="checkbox"/> 講義 <input type="checkbox"/> 演習 <input checked="" type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
臨床実習Ⅱ	羽澤 晃士 (実務経験教員)	1	2	後期
授業概要	臨床教育者のクリニカルクラークシップの要領による指導により、在宅・通所リハビリテーションにおける理学療法士の臨床活動を見学する			
到達目標	在宅・通所リハビリテーションにおける理学療法士の具体的な臨床活動、特に様々な障害に対応する各種の検査法について理解を深める			
授業計画				
1	<p>1単位（40時間）で行う臨床実習Ⅱ（見学実習）を通して、在宅・通所リハビリテーションにおける理学療法士の職務について理解を深める。</p> <p>臨床場面における理学療法士の活動、他のリハビリテーション関連職種との連携業務を見学し、リハビリテーション業務の全体像を理解する。また、臨床教育者の指導により、患者（利用者）と個別にコミュニケーションをとり、大まかな障害像を把握できるように学習する。</p> <p>本実習では、それぞれ臨床実習前の評価及び臨床実習後の評価を行う。</p> <p>臨床実習前の評価（8時間）により、どのような態度・視点で見学実習に臨めば目標を達成できるのかを学ぶ。患者（利用者）との接し方、臨床教育者とのコミュニケーションのとりかた、当該実習施設の役割や使命、リハビリテーション部門の大まかな業務の流れ（処方・評価・治療など）、理学療法士の具体的な業務、などを事前に学習し、自分で本実習の目標を立てることができるようになる。</p> <p>臨床実習後の評価（8時間）では、臨床実習Ⅱで学び得たことを発表し、他の学生からの質疑を通して到達目標を達成できたかを確認する。</p>			
2				
3				
4				
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
14				
15				
	既存の教科書を適宜使用する	履修条件	全日程の1/5以上欠席すると単位を認定しない	
参考書	既存の教科書、ノート、ジャーナルなどの参考資料を有効に利用すること	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	臨床実習前の評価、臨床実習後の評価、実習記録、課題等の成果物などを総合的に判断し評価する			
備考				

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input type="checkbox"/> 講義 <input type="checkbox"/> 演習 <input checked="" type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
臨床実習Ⅱ	羽澤 晃士 (実務経験教員)	3	2	後期
授業概要	臨床教育者のクリニカルクラークシップの要領による指導により、病院・施設における理学療法士の指導の下、見学・模倣の中で各種検査法の実習を行う			
到達目標	病院・施設における理学療法士の具体的な臨床活動、特に様々な障害に対応する各種の検査法について理解を深める			
授業計画				
1	3単位（120時間）で行う臨床実習Ⅱ（検査実習）を通して、理学療法士が対象者の検査をどのように実施しているかを見学・模倣を通して理解を深める。臨床指導者の指導により、各障害に対応する適切な検査法を選択し、患者（利用者）にそれを正確な手技で実施できるようになる。 本実習ではそれぞれ臨床実習前の評価及び臨床実習後の評価を行う。 臨床実習前の評価（24時間）により、どのような技能を身につけて実習に臨めば目標を達成できるのかを学ぶ。患者（利用者）との接し方、疾患・障害を理解するための情報収集の方法、対象者に応じた具体的な検査方法、その検査結果が示す健常者との相違点など、理学療法士が行っている検査法を事前に学習し、自分で本実習の目標を立てることができるようになる。 臨床実習後の評価（16時間）では、本実習で学び得たことを発表し、他の学生からの質疑を通して到達目標を達成できたかを確認する。			
2				
3				
4				
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
14				
15				
	既存の教科書を適宜使用する	履修条件	全日程の1/5以上欠席すると単位を認定しない	
参考書	既存の教科書、ノート、ジャーナルなどの参考資料を有効に利用すること	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	臨床実習前の評価、臨床実習後の評価、実習記録、課題等の成果物などを総合的に判断し評価する			
備考				

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input type="checkbox"/> 講義 <input type="checkbox"/> 演習 <input checked="" type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
臨床実習Ⅲ	羽澤 晃士 (実務経験教員)	9	3	前期
授業概要	臨床教育者のクリニカルクラークシップの要領による指導により、病院・施設における理学療法士の指導の下、見学・模倣・実施のプログラムの中で治療学実習を行う			
到達目標	病院・施設における理学療法士の具体的な一連の臨床活動（治療的介入）を見学・模倣・実施を通じて体験し、理解することができる			
授業計画				
1	<p>9単位（360時間）で行う臨床実習Ⅲ（総合実習）を通して、理学療法士が対象者の検査・評価・治療をどのように実施しているかを臨床教育者の指導のもとで見学・模倣・実施を通して理解を深め、各障害に対応する適切な治療法を選択し、患者（利用者）にそれを正確な手技で実施できるようになる。</p> <p>本実習ではそれぞれ臨床実習前の評価及び臨床実習後の評価を行う。</p> <p>臨床実習前の評価（24時間）により、どのような技能を身に付けて実習に臨めば目標を達成できるのかを学ぶ。患者（利用者）との接し方、疾患・障害を理解するための情報収集の方法、対象者に応じた具体的な検査・評価方法、その検査結果が示すICFに照らし合わせた問題点・利点の解釈、理学療法士が行う治療手技などを事前に学習し、自分で本実習の目標を立てることができるようになる。</p> <p>臨床実習後の評価（16時間）では、本実習で学び得たことを発表し、他の学生からの質疑を通して到達目標を達成できたかを確認する。</p> <p>指定規則に則り、臨床実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳのいずれかで、通所リハビリテーション又は訪問リハビリテーションに関する実習を1単位（40時間）以上行うこととする</p>			
2				
3				
4				
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
14				
15				
教科書	既存の教科書を適宜使用する	履修条件	全日程の1/5以上欠席すると単位を認定しない	
参考書	既存の教科書、ノート、ジャーナルなどの参考資料を有効に利用すること	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	臨床実習前の評価、臨床実習後の評価、実習記録、課題等の成果物などを総合的に判断し評価する			
備考				

<input type="checkbox"/> 選択 <input checked="" type="checkbox"/> 必修		<input type="checkbox"/> 講義 <input type="checkbox"/> 演習 <input checked="" type="checkbox"/> 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
臨床実習Ⅳ	羽澤 晃士 (実務経験教員)	9	3	前期
授業概要	臨床教育者のクリニカルクラークシップの要領による指導により、病院・施設における理学療法士の指導の下、見学・模倣・実施のプログラムの中で治療学実習を行う			
到達目標	病院・施設における理学療法士の具体的な一連の臨床活動（治療的介入）を見学・模倣・実施を通じて体験し、理解することができる			
授業計画				
1	<p>9単位（360時間）で行う臨床実習Ⅳ（総合実習）を通して、理学療法士が対象者の検査・評価・治療をどのように実施しているかを臨床教育者の指導のもとで見学・模倣・実施を通して理解を深め、各障害に対応する適切な治療法を選択し、患者（利用者）にそれを正確な手技で実施できるようになる。</p> <p>本実習ではそれぞれ臨床実習前の評価及び臨床実習後の評価を行う。</p> <p>臨床実習前の評価（24時間）により、どのような技能を身に付けて実習に臨めば目標を達成できるのかを学ぶ。患者（利用者）との接し方、疾患・障害を理解するための情報収集の方法、対象者に応じた具体的な検査・評価方法、その検査結果が示すICFに照らし合わせた問題点・利点の解釈、理学療法士が行う治療手技などを事前に学習し、自分で本実習の目標を立てることができるようになる。</p> <p>臨床実習後の評価（16時間）では、本実習で学び得たことを発表し、他の学生からの質疑を通して到達目標を達成できたかを確認する。</p> <p>指定規則に則り、臨床実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳのいずれかで、通所リハビリテーション又は訪問リハビリテーションに関する実習を1単位（40時間）以上行うこととする</p>			
2				
3				
4				
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
14				
15				
教科書	既存の教科書を適宜使用する	履修条件	全日程の1/5以上欠席すると単位を認定しない	
参考書	既存の教科書、ノート、ジャーナルなどの参考資料を有効に利用すること	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	臨床実習前の評価、臨床実習後の評価、実習記録、課題等の成果物などを総合的に判断し評価する			
備考				